

THE ANNUAL REPORT ON ARCHAEOLOGICAL RESEARCHERS  
THE KUMAMOTO UNIVERSITY/1999

6

熊本大学埋蔵文化財調査室年報 1999 年度







『熊本大学埋蔵文化財調査室年報 6—1999 年度—』

正誤表

訂正箇所	誤	正
3 頁 表 2 21 行 調査の種類	発掘調査	試掘調査
3 頁 表 2 23 行 調査の種類	試掘調査	発掘調査

THE ANNUAL REPORT ON ARCHAEOLOGICAL RESERCHERS  
THE KUMAMOTO UNIVERSITY/1999

6

---

熊本大学埋蔵文化財調査室年報 1999 年度

2000 熊本大学埋蔵文化財調査室



## 序 文

熊本大学埋蔵文化財調査室は、本学のキャンパス内に埋もれた文化遺産を調査する目的で、平成6年に設置されました。爾来、本学キャンパスの再開発の進行に伴って、埋蔵文化財調査委員会と密接な連携を保ちつつ、労苦の多い調査活動を極めて積極的に展開し、数多くの貴重な成果を蓄積すると共に、それらを公表してきました。

本平成11年度におきましては、黒髪地区の自然科学研究科・理学部合同研究棟等及び本荘地区的医学部附属病院西病棟等の新築工事に着手することを許され、これに関連する調査も含め調査室の遺跡発掘調査は14カ所、総面積は実に4800m<sup>2</sup>にも及びました。発掘は昨年4月から本年3月まで、休みなく実施され幾多の特筆すべき成果が得られました。本荘地区的調査によって、古墳時代の集落跡が発見され、白川左岸の自然堤防上には弥生時代以降久しく続いた古代人の居住地形の営みが明らかにされました。また黒髪地区では、少なくとも縄文時代後期から大規模な集落が営まれていたことを窺い知ることのできる結果が得られたのでした。

これらの成果は一部にすぎず、植物種子や動物遺存体などの自然科学の視点からも興味深い遺物をもたらされました。ために、調査にあたられた方々は多忙を極め、発掘物の自然科学的分析は今後の課題として残されましたが、本年度の成果はとりわけ豊かであり後の関連研究に大きな貢献を果たすであろうと思います。

埋蔵文化財の調査・研究は時間と多大の労力を必要としますが、報われることの少ない仕事であります。人的にもまた財政的にも極めて限られた不充分な条件下にも関わらず、着々と調査を進め成果を築いてこられました。熊本大学埋蔵文化財調査室長甲元眞之教授、同埋蔵文化財調査委員会委員長北野隆教授はじめ関係各位の御努力に対し深く感謝いたします。また、調査の結果が広く関係領域研究のために活用されることを強く希望します。

2000年3月25日

熊本大学

学 長 江口吾朗

## 例 言

1. 本書は熊本大学構内において、1999年4月1日から2000年3月31日まで行われた埋蔵文化財の調査および熊本大学埋蔵文化財調査室の活動内容に関する年次報告書である。
2. 構内遺跡の調査は、昨年度に引き続き、年次と調査順を示す調査番号で表すこととし、出土遺物や記録類もこの番号で整理管理している。
3. 遺跡略号は、地区ごとにローマ字3文字で以下のように表記した。黒髪町遺跡黒髪南地区（KKS）、同北地区（KKN）、本庄遺跡医学部構内（HJM）、同病院構内（HJE）。
4. 遺物への注記は、遺跡略号+調査番号+出土遺物（位置）の順で行った。
5. 本書に掲載した遺物やその他の出土遺物および調査にかかわる記録類はすべて熊本大学埋蔵文化財調査室にて保管している。
6. 本書で使用した遺構実測図は、小畠弘己・大坪志子をはじめとする調査参加者が、遺物実測・製図は小畠・大坪・藤江望・藤木聰・中川毅人が行った。
7. なお、遺構実測に遺跡調査汎用システム（カタタ Ver. 3 - アーケオテノクノ社）を使用した。
8. 本書の執筆は、表1、付録および抄録を松池木織子が、II-3及びII-4を小畠が、第III章は小畠・大坪が、跋文は甲元室長が、英文サマリーを大坪が、ハングル文については小畠が行った。その他の文章は大坪が執筆した。
9. 本書の編集は、甲元室長の指導のもと大坪が行った。

# 目 次

## 〈本文目次〉

第Ⅰ章 本年度の調査概要	1
第Ⅱ章 発掘調査	5
II-1 9901調査地点	5
1. 遺跡の立地と周辺遺跡	5
2. 調査の概要	5
3. 調査の結果	5
a 基本層序	5
b 検出遺構と遺物	9
4. 成果と問題点	26
II-2 9907調査地点	28
1. 遺跡の立地と周辺遺跡	28
2. 調査の概要	28
3. 調査の結果	30
a 基本層序	30
b 検出遺構と遺物	31
4. 成果と問題点	31
II-3 9908調査地点	33
1. 遺跡の立地と周辺遺跡	33
2. 調査の概要	33
3. 調査の成果	33
a 基本層序	33
b 検出遺構と遺物	34
4. 成果と問題点	34
II-4 9909調査地点	35
1. 遺跡の立地と周辺遺跡	35
2. 調査の概要	35
3. 調査の成果	38
a 基本層序	38
b 検出遺構と遺物	38
4. 成果と問題点	38
第三章 立会・試掘調査	43
III-1 黒髪南地区	43
1. 工学部研究実験棟II-2-2新営工事植樹に伴う立会調査(9903)	43
2. 自然科学研究科・理学部総合研究実験棟新営ガス設営工事立会調査(9905)	43
3. 自然科学研究科・理学部総合研究実験棟新営電気設営工事に伴う立会調査(9906)	43
III-2 本莊北地区	44
1. 血液照射管理室増築工事に係る試掘調査(9910)	44

## III-3 本莊南地区

1. 医学部エイズ学研究センター・動物資源開発研究センター新営に係る配管切替工事立会調査(9801)	45
2. 医学部エイズ学研究センター・動物資源開発研究センター新営電設工事に伴う立会調査(9902)	45
3. 医学部エイズ学研究センター・動物資源開発研究センター新営基礎工事に伴う立会調査(9904)	46

## 跋文

Summary	48
付篇	49
報告書抄録	52

## 〈図版目次〉

図1 黒髪町遺跡・本庄遺跡の位置と周辺遺跡の分布図 (1/25000)	2
図2 本莊北地区における調査地点配置図 (1/2000)	6
図3 9901調査地点遺構配置実測図(1/400)	7
図4 調査区壁土層断面実測図(1/80)	8
図5 各造構土層断面実測図(1/20・1/40)	10
図6 3・5号堅穴住居址実測図(1/50)	13
図7 3号堅穴住居址出土遺物実測図(1/4)	14
図8 5号堅穴住居址出土遺物実測図(1/2・1/4)	15
図9 80号堅穴住居址実測図(1/50)	16
図10 25・300号堅穴住居址実測図(1/50)	20
図11 25号堅穴住居址出土遺物実測図 (1/3・1/4)	21
図12 300号堅穴住居址出土遺物実測図 (1/3・1/4)	22
図13 500・501号掘立柱建物址実測図(1/100)	24
図14 115号陶衣壺・250号土槻墓 (1/4・1/40)	25
図15 鉄製品・土鏡・玉類実測図 (1/1・1/3・2/3)	26
図16 その他出土遺物実測図(2/3・1/4)	27
図17 黒髪南地区における調査地点配置図 (1/2000)	29
図18 9907調査地点遺構配置実測図・壁土層断面実測図	

(1/150・1/100) —————	30
図 19 9907 調査地点出土遺物実測図 (1/3) —————	32
図 20 9908 調査地点位置図 (1/2000) —————	33
図 21 黒髪南地区における調査地点配置図 (1/2000) —————	36
図 22 9909 地点造構配置実測図 (1/300) —————	37
図 23 調査区北壁土層断面実測図 (1/100) —————	38
図 24 『熊本之図』文化二年 (1805) にみる 調査地点の位置 —————	42
図 25 本荘南地区調査地点位置図 (1/2000) —————	46
 <b>〈写真目次〉</b>	
写真 1 I 区全景 (北東より) —————	5
写真 2 II 区・溝 (北西より) —————	9
写真 3 379・380・385 号溝 (南西より) —————	9
写真 4 2 号溝 (北西より) —————	9
写真 5 4 号溝 (北東より) —————	11
写真 6 4 号溝上部・遺物出土状況 (北東より) —————	11
写真 7 72 号溝 (北西より) —————	11
写真 8 57 号溝遺物出土状況 (北東より) —————	11
写真 9 15・16 号溝 (北東より) —————	11
写真 10 3 号竪穴住居址遺物出土状況 (南東より) —————	12
写真 11 5 号竪穴住居址遺物出土状況 (南西より) —————	12
写真 12 80 号竪穴住居址遺物出土状況 (北西より) —————	12
写真 13 80 号竪穴住居址 (南東より) —————	12
写真 14 35 号竪穴住居址 (南西より) —————	17
写真 15 113 号竪穴住居址 (北東より) —————	17
写真 16 360 号竪穴住居址 (北西より) —————	17
写真 17 387 号竪穴住居址 (北西より) —————	17
写真 18 352・353 号竪穴住居址 (北西より) —————	17
写真 19 346 号竪穴遺物出土状況 (南東より) —————	18
写真 20 43・50 号竪穴住居址 (北東より) —————	18
写真 21 52 号竪穴住居址 (北より) —————	18
写真 22 310 号竪穴住居址 (北より) —————	18
写真 23 290 号竪穴住居址 (南東より) —————	19
写真 24 291 号竪穴住居址 (南東より) —————	19
写真 25 297 号竪穴住居址 (西より) —————	19
写真 26 355 号竪穴住居址 (南より) —————	19
写真 27 25 号竪穴住居址遺物出土状況 (北西より) —————	19
写真 28 25 号竪穴住居址竪 (北西より) —————	21
写真 29 300 号竪穴住居址 (西より) —————	21
写真 30 300 号竪穴住居址竪 (西より) —————	23
写真 31 157 号竪穴住居址 (東より) —————	23
写真 32 258 号竪穴住居址 (北より) —————	23
写真 33 500・501 号掘立柱建物址 (北より) —————	23
写真 34 115 号胞衣塗 (西より) —————	25
写真 35 250 号土壙墓 (南より) —————	26
写真 36 馬骨出土状況 (西より) —————	26
写真 37 調査区全景 (南より) —————	28
写真 38 調査区南隅傾斜部分 (北より) —————	31
写真 39 繩文土器出土状況 (北西より) —————	31
写真 40 調査風景 (北より) —————	34
写真 41 トレチ 1 (南より) —————	34
写真 42 III 層出土状況 (南より) —————	34
写真 43 トレチ 2 (北より) —————	34
写真 44 調査風景 (北東より) —————	35
写真 45 I 区全景 (東より) —————	39
写真 46 II 区全景 (南より) —————	39
写真 47 II 区北壁土層断面 (南より) —————	39
写真 48 鉄錢・銅錢出土状況 (東より) —————	39
写真 49 調査区全景 (北東より) —————	39
写真 50 9903 地点掘削状況 (北より) —————	43
写真 51 9905 地点立会掘削風景 (北西より) —————	43
写真 52 9906 地点 I 区全景 (北より) —————	44
写真 53 9906 地点検出の第 1 号溝 (東より) —————	44
写真 54 9906 地点検出の第 2・3 号溝 (南東より) —————	44
写真 55 9906 地点検出の第 5 号溝 (南より) —————	44
写真 56 9910 地点試掘トレチ (西より) —————	44
写真 57 9801 地点掘削状況 (南より) —————	45
写真 58 9902 地点 I 地点遺構 (南より) —————	45
写真 59 9902 地点 I 地点遺構検出状況 (南より) —————	45
 <b>〈表目次〉</b>	
表 1 熊本大学敷地埋蔵文化財包蔵地指定一覧 —————	1
表 2 1999 年度調査一覧 —————	3
表 3 肥後に於ける江戸中期～後期 (元禄～嘉永年間) の水害記事 —————	40

## 第Ⅰ章 本年度の調査概要

本年度の調査は、表2にあるように、発掘調査4件、立会調査8件、試掘調査2件であった。

本年度は4月当初から9月初まで大規模な調査が行われた。本荘北地区（医学部附属病院）における病棟建設に伴う調査である（9901）。当初は昨年度に実施される予定であったが、平成10年度補正予算により理学部自然科学等総合実験棟新事業が急速浮上し、施設部との協議の結果自然科学等総合実験棟新館に伴う調査を優先して行い、当調査および年報の作成の終了を待って本年度に調査を実施することとなった。昨年度末に実施された本工事の事前整備工事に伴う立会調査で、古代の竪穴住居址や遺物包含層を確認していたが、本調査においてこれらを含む古墳時代前期から古代にかけての竪穴住居址や掘立柱建物址、溝などが確認された。本荘北地区における大規模調査は1996年におこなわれた医学部校舎建設に伴う調査（9601）に次ぎ2回目である。このときの調査でこの付近一帯では初めて古墳時代の遺構が確認されていたが、本調査地点で当該期の住居址が改めて検出された。土器など当該期の良好な資料も得られた。

黒髪南地区で実施された工学部工友寮跡地での実験

用ブレハブ取設に伴う調査（9907）では、縄文時代後晩期の土器が出土した。明確な遺構は検出されなかつたが、調査区の一部が白川にむかって傾斜しており旧河川敷かとも考えられる。

年次報告作成中である現在、衝撃・極限環境研究センター、サテライト・ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー建設に伴う発掘調査（9909）と水生動物飼育舍建設に伴う発掘調査（9911）を行っている。衝撃・極限環境研究センター、サテライト・ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー建設に伴う発掘調査では近世中期の細遺構とそれに近い時期の墓が検出されている。200条余りの墓が整然と作られており、水洗選別による土壤の調査の結果、穀物類が検出されている。水生動物飼育舍建設に伴う調査では、9907地点同様に河川の土砂運搬の影響を受けたことが分かる一方、9907地点とは全く異なる旧地形で深さが3~4倍に達しており、古代の遺物包含層のほか縄文時代の遺物も出土している。縄文時代の遺物については9802調査地点と同様の層から出土しており、本地点でも包含層を2枚確認した。9907・9909調査地点を含め白川の河川沿いは、現在の整地された様子からは

表1 熊本大学敷地埋文化財包蔵地指定一覧（アミ部分は本年度調査した地区を示す）

No.	地区名(学部名)	所 在 地	遺跡名	遺跡の種類	遺跡の時代	備 考
1	黒髪北地区(法・文・教養)	熊本市黒髪2丁目40-1	黒髪町遺跡	集落址	縄文・弥生・奈良・平安	
	黒髪北地区(教育)	熊本市黒髪5丁目17-1				
2	黒髪南地区(工・理)	熊本市黒髪2丁目39-1	黒髪町遺跡	集落址	縄文・弥生・奈良・平安	
3	京町地区(教育学部附属小・中学校)	熊本市京町本町5-12	京町台遺跡	集落址	弥生・近世	
4	城東地区(附属幼稚園)	熊本市城東5-9	熊本城址	城館址・熊本城 関連遺構	近世	
5	教育学部新南部農場	熊本市新南部屋敷240-1	新南部遺跡	散布地	縄文・弥生	
6	理学部薬用植物実験所	天草郡松島町大字会津 6061	前島貝塚	集落址	縄文・弥生	1995年度の調査 によって貝塚でないことが判明
7	本荘南地区(医)	熊本市本荘2丁目2-1	本荘遺跡	散布地・集落址	縄文・弥生・奈良・平安・中世	
8	本荘北地区(医学部附属病院)	熊本市本荘1丁目1-1	本荘遺跡 (北大病院敷 地遺跡)	散布地・集落址・墓地	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・近代	
9	九品寺地区(医・薬)	熊本市九品寺4丁目24-1	本荘遺跡	散布地・集落址	縄文・弥生・奈良・平安・中世	周辺遺跡
10	薬学部	熊本市大江木町5-1	出水国府跡	官衙跡	奈良・平安	周辺遺跡
11	大江地区	熊本市波鹿4丁目1-1	大江遺跡	集落址	奈良・平安	

図1 黒巣町遺跡・本庄遺跡の位置と周辺遺跡の分布図（1/25000）



表2 1999年度調査一覧

調査期日	調査番号	地 点 名	調査の種類	調査面積	時 代	遺構・遺物
99.4.5～ 9.2	9901	(医病) 病棟(輪) 新営工事	発掘調査	2,405m <sup>2</sup>	縄文・古墳・古代・近代	縄文時代石器・玉・古墳時代住居址・溝・土師器・古代住居址・柱穴溝・土壤墓・土師器・須恵器・鉄器・胞衣壺・土鏡・近代溝。
99.6.14～ 7.14	9902	医学部エイズ学研究センター・動物資源開発研究センター新営電設工事立会	立会調査	40m <sup>2</sup>	古代	古代柱穴・溝・遺物を少量検出。
99.6.17	9903	工学部研究実験棟II-22新営工事に伴う植樹立会	立会調査	10m <sup>2</sup>		遺構・遺物なし。
99.7.19 99.7.26	9904	医学部エイズ学研究センター・動物資源開発研究センター新営基礎工事立会	立会調査	2m <sup>2</sup>	古代	遺構・遺物なし。
99.7.29～ 7.30	9905	自然科学研究科・理学部総合研究実験棟新営ガス設備工事	立会調査	50m <sup>2</sup>		遺物・遺構なし。
99.7.2～ 8.7	9906	自然科学研究科・理学部総合研究実験棟新営電気設備工事立会	立会調査	200m <sup>2</sup>	古代	古代溝6条・柱穴2個・古代土器片少量を検出。
99.9.22～ 10.5	9907	工学部実験用プレハブ新築工事	発掘調査	136.5m <sup>2</sup>	縄文時代前期～晩期	ピット群・縄文土器片出土。
99.11.24～ 11.25	9908	附属養護学校給食室増改築工事	発掘調査	42m <sup>2</sup>	近世以降	トレンチ2本設定して調査したが、遺構なし。近世磁器片。
00.2.14～ 3.24	9909	工学部衛生・極限環境研究センター・野外・ベンチャービジネス・ラボラトリ新営工事	試掘調査	1,853m <sup>2</sup>	近世・近代	烟址・墓地・近世陶磁器・煙管・銅・鉄鋳。
00.1.25	9910	本荘団地北地区血液照射管理室増改築試掘	試掘調査	2m <sup>2</sup>		擾乱著しく、遺構・遺物とともに確認できず。
00.3.1～ 3.14	9911	黒堀団地南地区水生動物飼育舍増築工事	発掘調査	30m <sup>2</sup>	古代・縄文中期・後期	古代土師器・須恵器・縄文土器。
00.3.14	9912	黒堀団地南地区・東地区外灯取設工事立会	立会調査	3m <sup>2</sup>		遺物・遺構とともに確認できず。
00.3.21	9913	医学部液化窒素供給設備新設工事立会	立会調査	7.84m <sup>2</sup>		遺物・遺構なし。
00.3.16	9914	本荘団地南地区さく井設備工事立会	立会調査	25m <sup>2</sup>		遺物・遺構なし。

予想し難い旧地形をしており、また河川を目前に控えたところまで畠地として利用されていたことが明らかにされた。

本年度の調査は、本荘北地区や黒堀南地区の大規模な調査により、大学構内に限らずこの周辺においてもこれまで本格的な調査や確認のなされなかった時代の遺構・遺物を検出・確認するなど、大きな成果を得た。また、その他の小規模な調査地点においても縄文時代の遺物包含層を確認しており、昨年度指摘したように今後の調査は古代の遺物包含層とともに縄文時代の包含層についても注意を払わねばならないことが確実となってきた。

このように、大学内に包蔵される遺跡群の重要性が認識される一方、発掘調査の規模は拡大する傾向にあり、得られる資料も増加している。本年度の大規模調査においても、膨大な量の資料が得られているが、こうした遺物の整理が滞っている。昨年度からは理化学的な分析の方法も導入し、徐々に成果を上げつつあるが、これらも限られた人手と時間の中で行っており十分とは言い難い。

遺跡から得られる情報を十分に収集し、遺物の精査を含め総合的な検討と評価を行うために、調査体制とその後の整理作業の整備が望まれる。



## 第II章 発掘調査

### II-1 9901調査地点

#### 1. 遺跡の立地と周辺遺跡

本莊北地区に所在する本庄遺跡は、熊本市遺跡地図No.8-95の熊大病院敷地遺跡として周知されている遺跡である。

阿蘇に発する白川は、中流域で河岸段丘を発達させながら熊本大学黒髪地区付近で蛇行したあと穂かな流れとなつて下流へ下る。本遺跡はその中流から下流へさしかかる地点であり、白川左岸に形成された自然堤防上（標高14m）に位置している。

本莊北地区において昨年実施された中央診療棟建設に伴う発掘調査（9807）では、7世紀後半から9世紀初頭にかけての堅穴住居址や掘立柱建物が検出された（熊本大学埋蔵文化財調査室年報5）。また1996年に行われた医学部校舎建設工事に伴う発掘調査（9601）では8世紀～9世紀の古代の集落址が調査された。その際「田井」「杉本寺」などのヘラ書きや墨書きをもつ土器が大量に出土した。また古墳時代前期の住居址が、付近一帯としては初めて確認され、古墳時代から古代にかけての複合的な遺跡の広がりを示している（熊本大学埋蔵文化財調査室年報3）。これらの出土遺物と類似した「田井」のヘラ書き土器が出土している大江遺跡群や新屋敷遺跡といった奈良・平安時代の集落址が、本遺跡の上流に控えている。

#### 2. 調査の概要

平成10年の年度当初計画にあげられていた事業である。8月中旬に施設部より発掘調査の依頼があった。調査期間を積算したところ半年以上かかることになり、調査員二人で調査に当たることとした。諸手続き・準備を終えた後年内に調査を開始すると、調査期間中に1・2月の年報作成期間にかかり調査を一時中断せねばならないため3月から調査に入ることになった。

ところが、年度末に補正予算によって年報作成期間にもかかわらず理学部自然科学等総合実験棟の新営工事に係る発掘調査を優先して行わねばならず、3月からの本事業の調査には二人体制では臨めない状況となった。このため施設部と協議を重ね、12月～1月の間に調査予定地内の支障配管切替工事を先行して行い（熊本大学埋蔵

文化財調査室年報5）、理学部の調査の終了を待って4月から本調査に入ることになった。

本調査は4月5日より開始した。廃土処理等の都合から調査区をI区（東側）とII区（西側）に2分割し、I区から調査を行った。6月21日にI区の調査を終了し、廃土を移動させ7月5日からII区の調査を開始した。8月30日に現場説明会を開き、9月2日をもって全ての作業を終了した。

#### 〈調査面積〉

2405m<sup>2</sup>

#### 〈調査期間〉

1999年 4月5日～9月2日

#### 〈調査員・参加者〉

小畠弘己、大坪志子、

上野しづ香、岡崎光子、岡田イツ代、岡村久美子、押方富江、甲斐田末男、勝野義勝、熊本茂仁、黒木重信、黒木タケ子、古賀敬子、小細工洋子、坂口三輝子、白石亜紀、白石美智子、鉢木笙子、高松北子、溜潤俊子、土田ちえみ、中川毅人、橋口剛士、林田恵子、番山明子、福田久美子、古野京子、堀川貞子、松井昭子、宮村邦子、宮本里美、宮本千恵子、村上浩明、森川征子、森川謙、森田ミドリ、吉田ひろこ、また、徐錦曼氏（熊本大学文学部）の協力を得た。

#### 3. 調査の結果

##### a 基本層序

調査区は周囲全てが包含層や造構面まで搅乱を受けており、周辺での調査において参考となるような良好な層序の確認は出来ていない。かろうじて、調査区の東壁で写真1 I区全景（北東より）

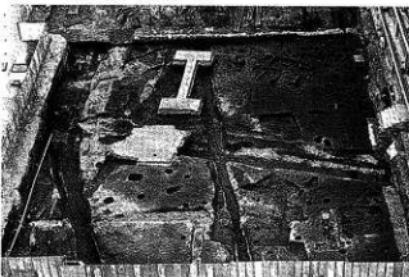


図2 本荘北地区における調査地点配置図(1/2000)

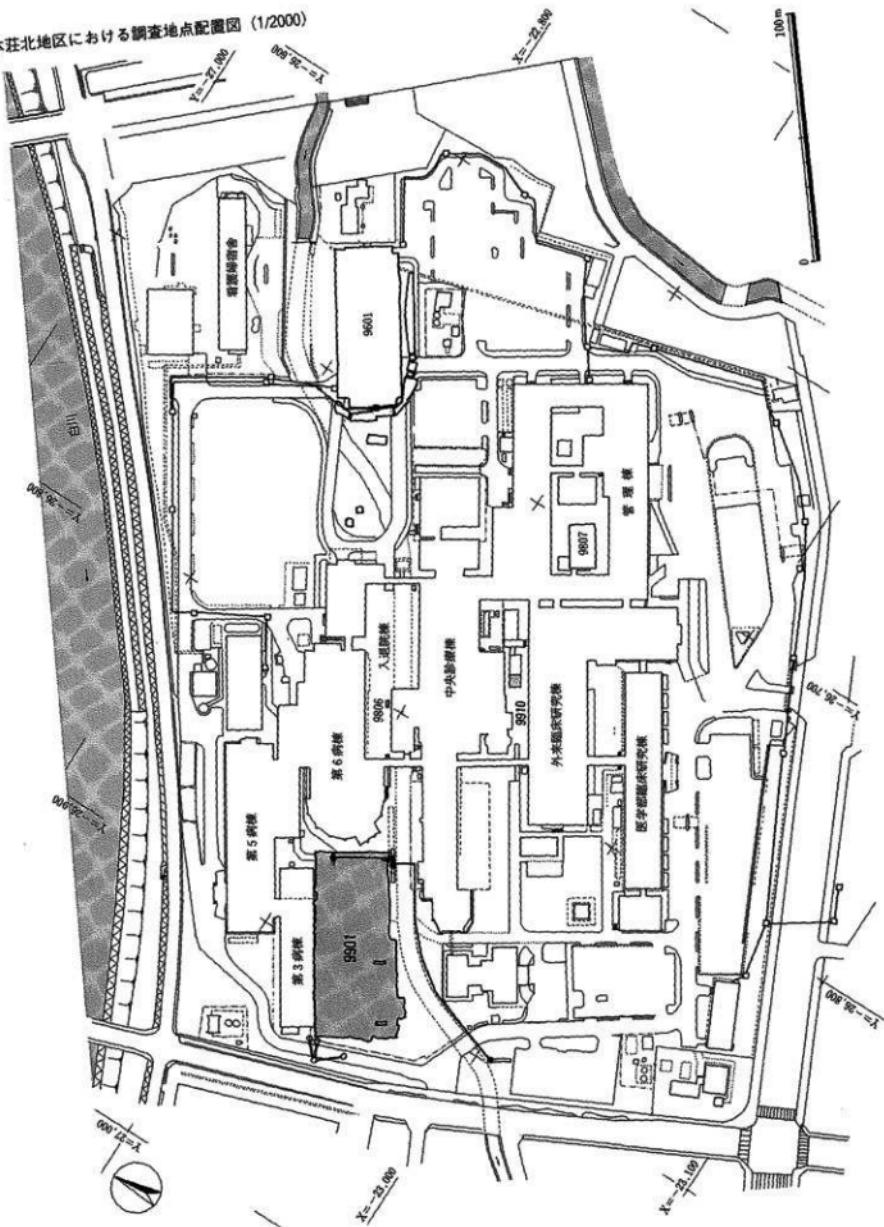


図3 9901調査地点遺構配置実測図(1/400)

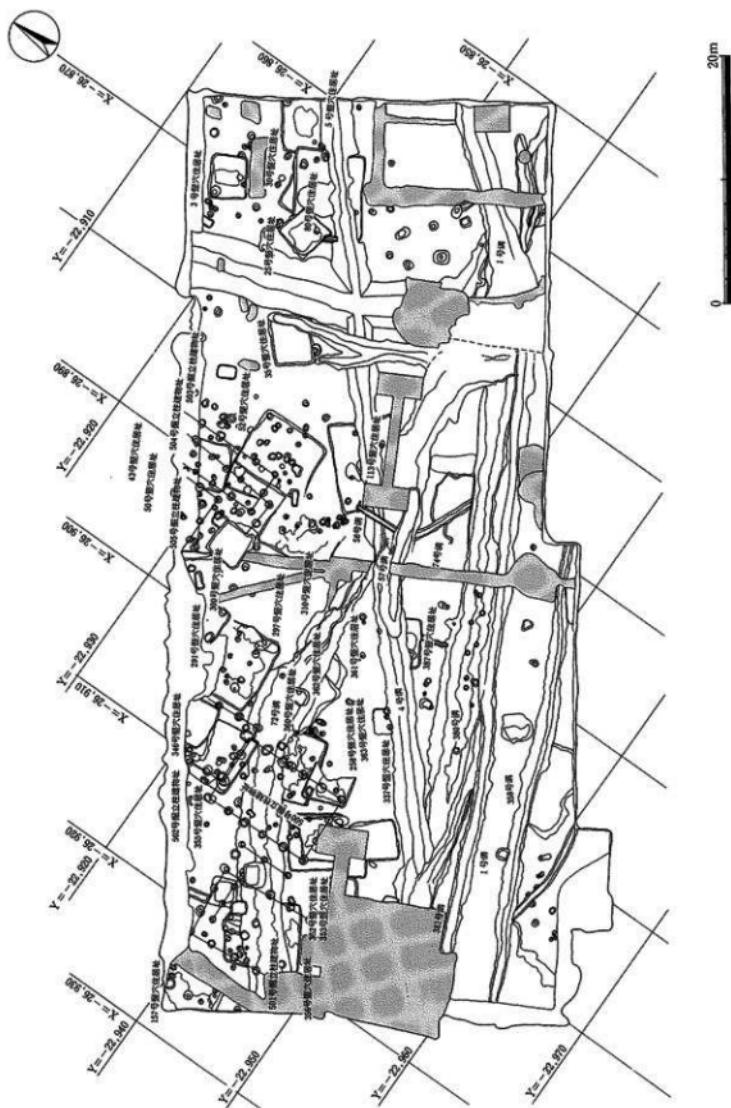
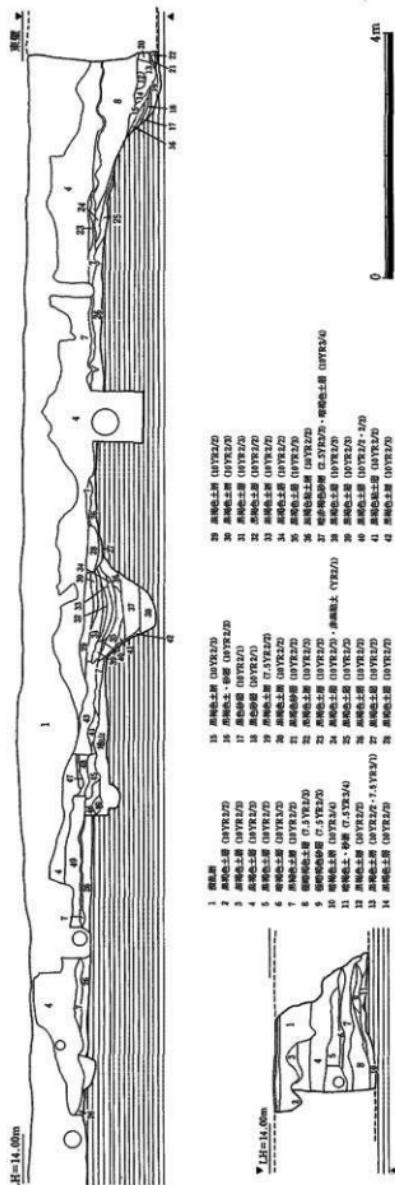


図4 調査区壁土層断面実測図 (1/80)



遺物包含層と遺構面のある程度の深さなどがおさえられた。1～4・23層までは近・現代埋土で深さ1.4m辺りまで堆積している。5層一黒褐色土層(10YR2/2, 厚さ25cm)と6層一暗褐色土層(10YR3/3, 厚さ15cm)は近世・近代の耕作土である。7層一黒褐色土層(10YR2/2, 厚さ4～30cm)が古代の遺物包含層である。5・6層が確認できた南側の一部で最も遺存がよかつたが、その他の箇所では削平されていた。7層下の26層は古墳時代の遺構の覆土である。これまでには遺構検出面(地山)としている暗褐色土の直上に古代の遺物包含層が堆積していたが本調査区では古代の遺物包含層下に古墳時代の遺構の覆土があり、古墳時代の遺構の広がりに伴い場所によっては古墳時代の遺構覆土・遺物包含層がある可能性を示している。

#### b 検出遺構と遺物(図3)

今回の調査で検出した主な遺構は、古墳時代前期の竪穴住居址9基と土塙3基、8世紀後半の竪穴住居址9基、9世紀前半の竪穴住居址3基、掘立柱建物址6棟、溝が大小合わせて18条である。

#### <溝>

##### 1・380・358号溝

3条とも並行に調査区を北東一南西方向に貫く。1号溝は幅最大2m、深さは最も深いところで1.2mである。II区では幅を1m前後にたもって南西から北東に向かって流れている。380号溝は幅2.6m前後、深さ0.2mである。2号溝に切られている辺りでゆるく湾曲しているが、両者はこの辺りで重なるものと思われる。358号は幅1.5m前後、深さ0.4mである。3条とも、水の作用によるマンガン沈殿物と思われる鉱物で被覆されていた。設営時の溝の形状をとどめていると思われる。2号溝より東の部分で特にマンガン沈殿物の被覆が複雑に重複し

写真2 II区・溝(北西より)



ていたため流路の決定に困難をきたした。この部分では1号溝内に数度の掘直しがあったことが確認されており、西から伸びてくる1号溝はこれらのうちの1条につながり、2号溝より東で1号溝としている溝が380号溝に対応するのではないかと考えられる。3条の溝の設営時期は近いものであろうが、1号溝と380号溝については遺物の整理・精査を待って検討したい。

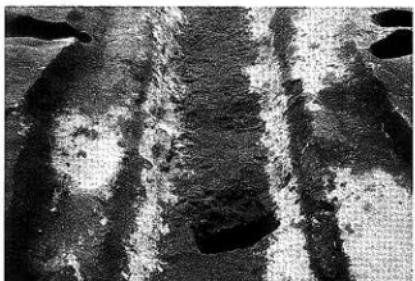
写真3 379・380・385号溝(南西より)



2号溝

調査区を北北西一南南東に走っている。幅約5m、深さ約1.1mで、溝の中で最も大きな溝である。北に向かって流れている。時期は最も新しく近代以降のものである。

写真4 2号溝(北西より)



4号溝

調査区を北東一南西に貫く。1・380号溝より若干北に掘れています。幅約2.2m、深さ1.1m前後で一直線に掘削され北東から南西に流れている。古墳時代前期の住居址を切っているが、5世紀には既に設営・利用されていたと思われる。上面で土師器甕と須恵器甕等を並べるか重ねて故意に破損してあった。祭事を行った跡と思われる。8世紀前半には埋没していたと考えられる。

図5 各造構土層断面実測図 (1/20・1/40)

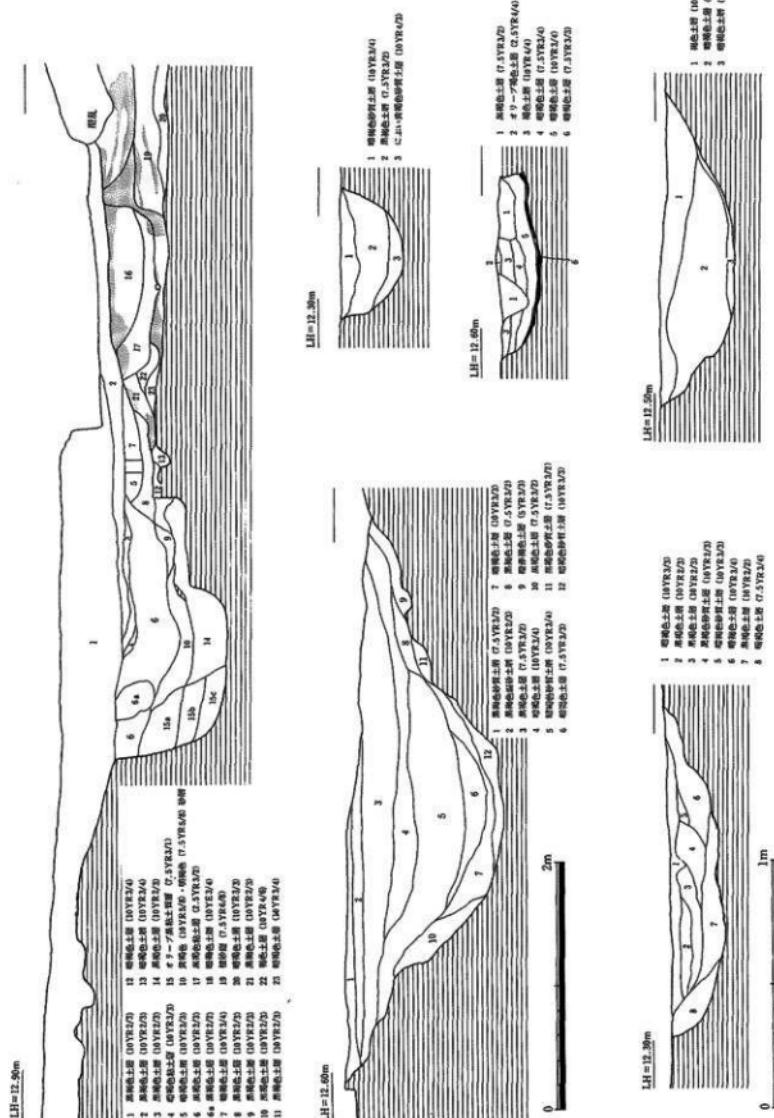


写真5 4号溝（北東より）



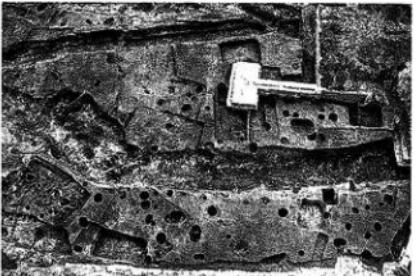
写真6 4号溝上部・遺物出土状況（北東より）



### 57・72号溝

72号溝は調査区を湾曲しながら東西に走っており、57号は72号溝がある程度埋没した段階で新たに掘りこまれている。72号はⅡ区では幅約3.4m前後で安定しているが、調査区の中央より東では擾乱やその他の溝との重複などにより形状が一定しない。川底はマンガンと砂の互層となっていた。遺物より6世紀中頃には設営・利用され、8世紀後半までには埋没したと思われる。

写真7 72号溝（北西より）



57号溝は幅約1m、深さ0.1mで72号溝に沿って流れているが、終始が不明確である。遺物より8世紀中頃から利用され短期間のうちに埋没したと思われる。

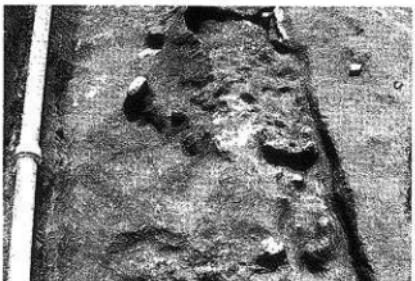
写真8 57号溝遺物出土状況（北東より）



### 15・16・74・373号溝

それぞれ幅が約1m、深さが20cm程度の細く浅い溝である。15号・16号溝は周辺と同じくマンガンの沈着があるが形状は不明確である。砂とマンガン層が互層となって堆積していた。74・373号溝はマンガンの沈着を受けていない。いずれも遺物が少ないため時期判定は難しい。

写真9 15・16号溝（北東より）



### 58号溝

調査区中央を北に向かって流れている、幅0.8m、深さ0.15mの小さな溝である。方位から8世紀後半以降、条里にならって設営されたものと思われる。

1号・380号溝の周辺ではマンガンの沈着が著しかった。それぞれの溝がいわばマンガンによりコーティングされた状態であった。またマンガンの層は数枚あり、4号溝を境として南側に大地が傾斜する辺りまで及んでおり、溝の掘削を繰り返すとともに溝が埋没した後も低地で長期間水の作用を受けていたと思われる。

### 〈竪穴住居址〉

#### 古墳時代の竪穴住居址

##### 3号竪穴住居址（図6）

I区の調査区北壁近くで検出された。縦2.9m、幅3.6mで、軸は南北方向に対しちょうど45°東西に振れています。検出時の深さは約30cmである。調査区の中でも高い位置にあるため、上面はかなり削平されている。中央部で硬化した床面が確認できた。また、東南側の壁近くに炉穴と思われる穴が確認された。柱穴は検出されなかった。

この住居址からは、良好な状態で遺物が多量に出土しました（図7）。焼土や木炭、砂岩が床面に散在していました。出土した土器の器種には高壺・小型丸底壺・壺・甕がある。これらは布留1式～布留2式、4世紀前半に比定できよう。

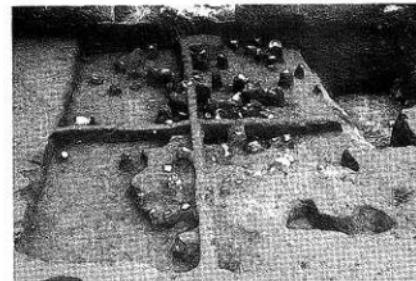
写真10 3号竪穴住居址遺物出土状況（南東より）



5号竪穴住居址（図6）

I区の東壁側で検出した。東側一部が調査区外に延びる。軸は3号住居址と同一方向である。住居址の南東半分が4号溝によって削られている。現状では縦約3.2m、幅4.2mである。隣接する80号竪穴住居址の様子から、4号溝の対岸あたりに南壁があったと考えられる。検出時

写真11 5号竪穴住居址遺物出土状況（南西より）



の深さは20cmである。

本住居址からも良好な状態の土器が多く出土したほか、木炭などが床面に散在していた。住居址の中央では硬化した床面が確認されたが、柱穴は検出されなかった。出土した土器の器種には高壺・小型丸底壺・壺・鉢・器台・甕がある。これらは3号住居址の出土土器と同じく布留1式～布留2式に比定される。また、手捏の高壺のミニチュアも出土している（図8～20）。

##### 80号竪穴住居址（図9）

5号竪穴住居址の西側に隣接し、5号住居址の西壁を一部切ったかたちで検出された。80号竪穴住居址も南西側半分を4号溝により削られているが、対岸に南壁が遺存しており全体のプランは確認可能である。4号溝より北側の部分を検出した当初は、2基の竪穴住居の重複と考えて掘り下げを行ったが、溝の対岸の様子から1基の住居であると判断した。8世紀と9世紀の竪穴住居址が重複している。軸の向きは3・5号住居址と同一方向である。縦5.6m、幅7.4mである。中央部分で硬化した床面が確認されたが、柱穴は検出されなかった。遺物より布留2式の頃と思われる。

写真12 80号竪穴住居址遺物出土状況（北西より）



写真13 80号竪穴住居址（南東より）



図6 3・5号竪穴住居址実測図 (1/50)

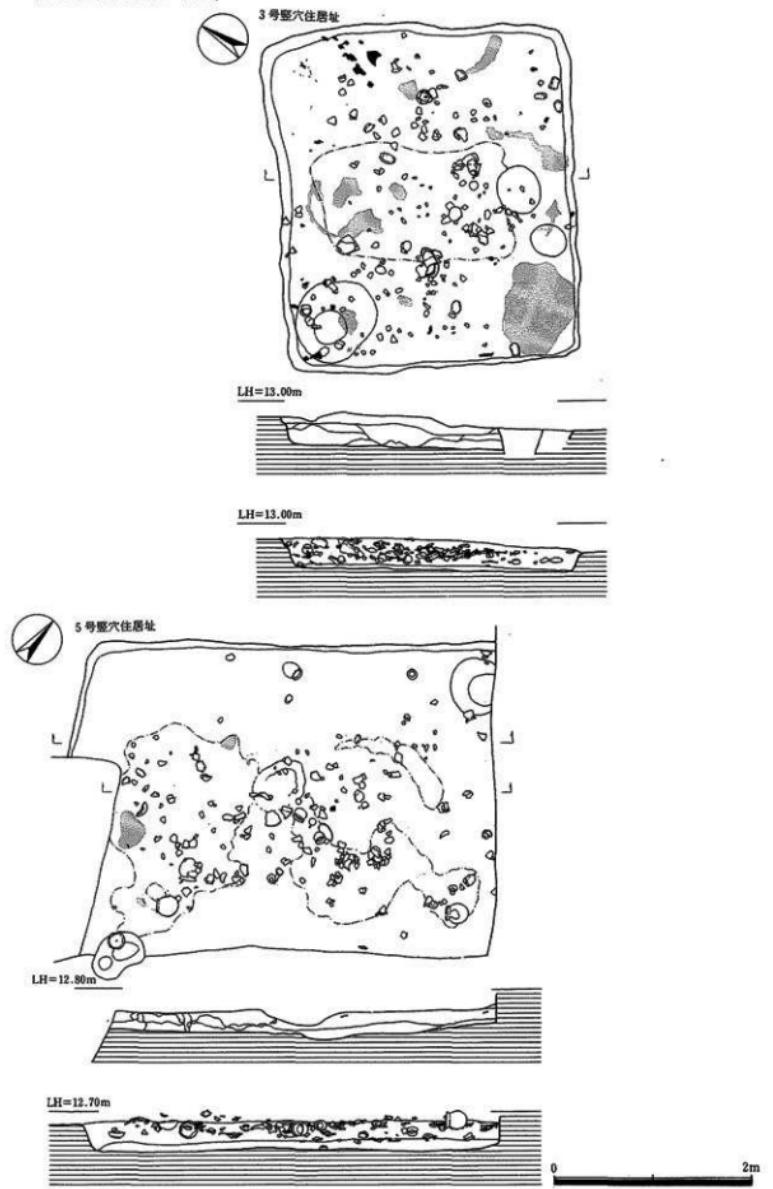


図7 3号竪穴住居出土遺物実測図 (1/4)

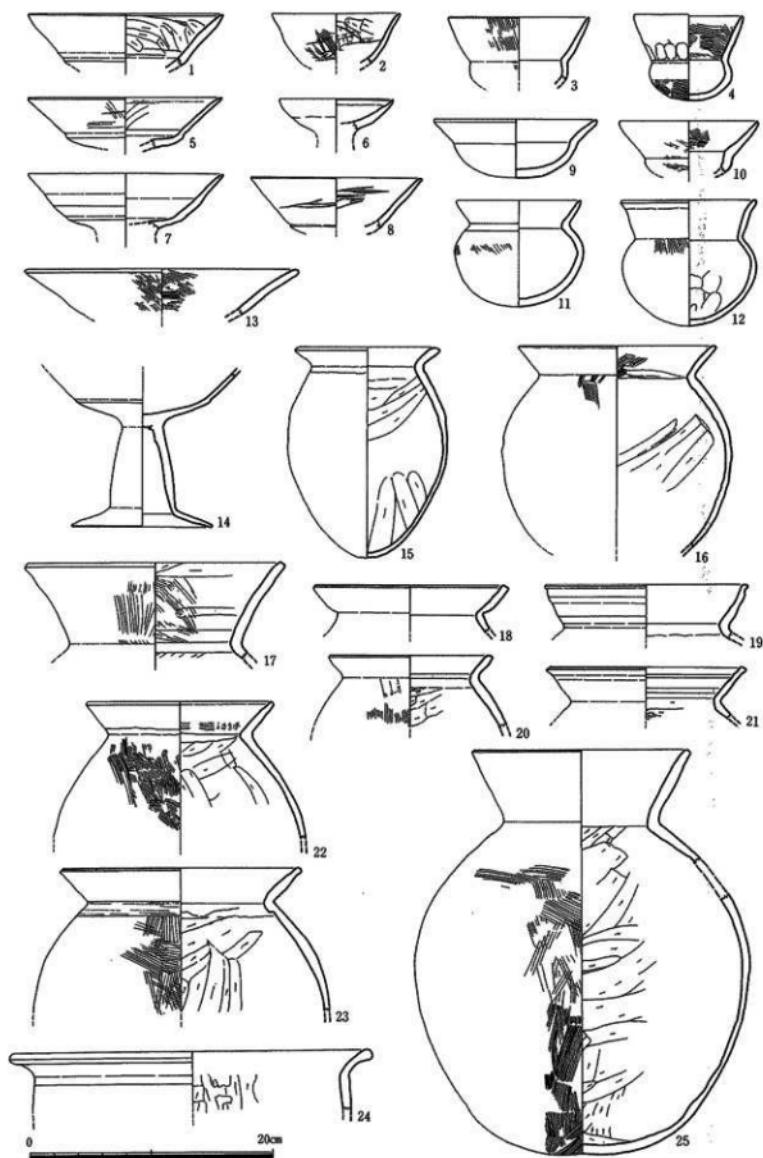


図8 5号竪穴住居址出土遺物実測図 (1/2・1/4)

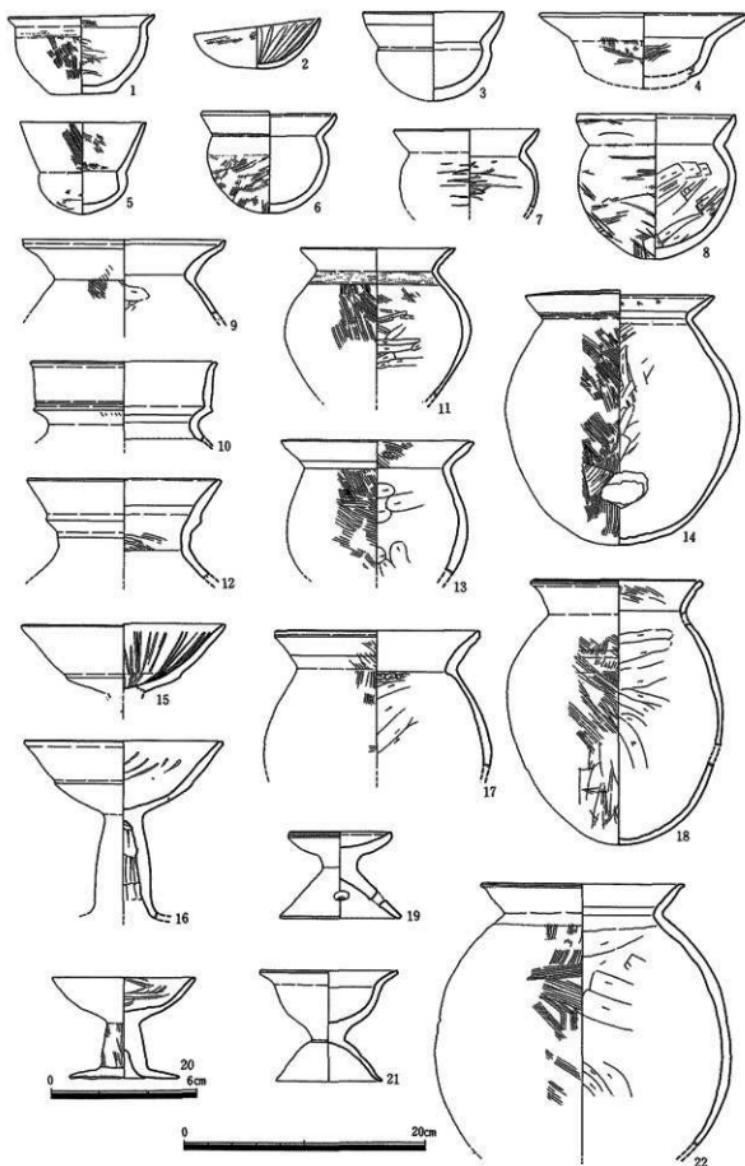
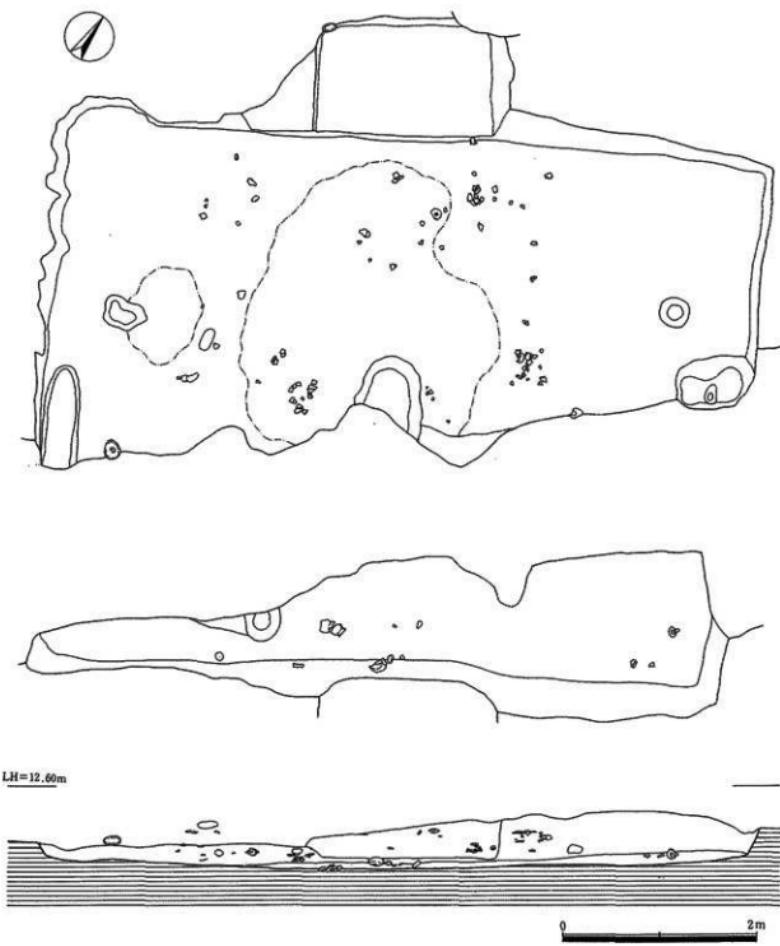


図9 80号竪穴住居址実測図(1/50)

**35号竪穴住居址**

2号溝の東側で検出した。軸の方向は3号住居址より少し西に振れている。縦5m、幅約5.9mである。後に37号溝が掘りこまれマンガン層の沈着などがある。硬化面や柱穴などは検出されなかった。床面には土器片や円礫、焼土が散在していた。特に、円礫が多くったのが

注目される。軸の方向より3・5号竪穴住居址と同じく4世紀と思われる。

**113号竪穴住居址**

調査区の中央部で検出された。住居址の中央部を4号溝が貫き、また近・現代の建物基礎により南半を破壊されている。35号竪穴住居址や52号竪穴住居址がある大

写真14 35号竪穴住居址（南西より）



地は4号溝に向かって傾斜しており本住居址付近は浅い溝状になっていた。軸は北西より若干西に振れ、4号溝とは直交している。現状で縦5.3m、幅7.4mである。深さは5cm前後でかろうじてプランを確認した。硬化面を一部確認したほかは、明確な柱穴は確認されず、遺物も少ない。

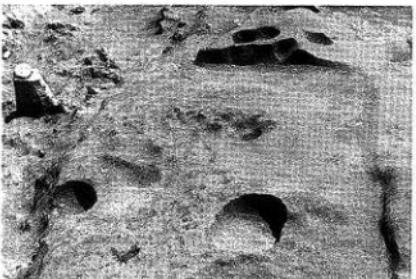
写真15 113号竪穴住居址（北東より）



360号竪穴住居址

II区の中央やや北の位置で検出した。北半を72号溝に切られて消滅している。また258号竪穴住居址が切つ

写真16 360号竪穴住居址（北西より）



ている。現状では縦3.2m、幅5.7m、深さは30cmである。軸は南北より若干西に振れる。住居址中央で硬化面と炉穴と思われるピットを確認した。柱穴は検出されなかった。他の古墳時代前期の住居址と比較すると軸が南北に近い。また、壁に沿って周囲に細い溝を廻らせるなど相違点がある。500号掘立柱建物址に切られているため8世紀後半を下ることはない。

387号住居址

調査区の中央付近で検出した。4号溝の掘り下げ時に断面から確認した。全体の1/4程度が残っている。現状で縦1.2m、幅4.3m、深さは10cmである。軸は3・5号竪穴住居址と同じである。硬化面は確認したが柱穴は検出されなかった。床面には数点の土器と木炭が散在していた。出土した土師器から布留1式～布留2式の頃と思われる。

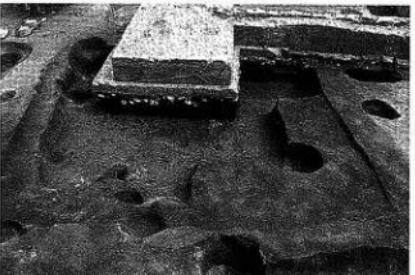
写真17 387号竪穴住居址（北西より）



352・353号竪穴住居址

II区の中央やや西側で検出した。一部を近現代の建物基礎で破壊されている。353号が352号住居址の中央に入れ子状に掘りこまれている。352号住居址は縦4.3m、幅4.6m、深さ5cm、353号住居址は縦2.6m、幅3.6m、深さ30cmである。353号住居址では硬化した床面

写真18 352・353号竪穴住居址（北西より）



が確認できたが、炉穴や柱穴は検出されなかった。遺物が少なく時期判定は難しいが、住居の軸方向は 113 号と同一で 4 世紀代であろう。

その他 337 号遺構および 346 号遺構も住居址である可能性ある。ただし 346 号遺構 ( $3.6 \times 2.1\text{ m}$ ) は遺物が多いものの深さが 1.1 m あり、ほかの住居址とは違っている。363 号遺構は 2 m 四方程度の掘りこみである。土器の細片がわずかと確認が数個あったほかは、硬化した床面や柱穴も見られない。

写真 19 346 号竪穴遺物出土状況（南東より）



#### 古代 I 期の竪穴住居址

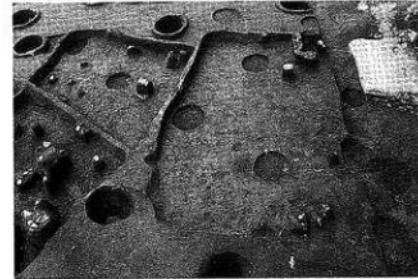
##### 30 号竪穴住居址

80 号竪穴住居址の上に掘りこまれていた。当初 80 号竪穴住居址を別のプランで検討し 80 号住居址を先に掘り下げたため全体の正確なプランを把握できなかった。軸は東西を向いており、おそらく 4 m 四方ほどのプランであったと考えている。北壁側でわずかに硬化した床面と窓の白色の粘土と焼土が確認された。

##### 43 号竪穴住居址

調査区中央の北側で検出した。配管工事により、住居址の北壁を削平されている。現状で縦 2.7 m、幅 3.9 m。

写真 20 43-50 号竪穴住居址（北東より）



深さは約 20 cm である。軸は南北より若干西に振れている。硬化した床面や柱穴は確認されなかった。

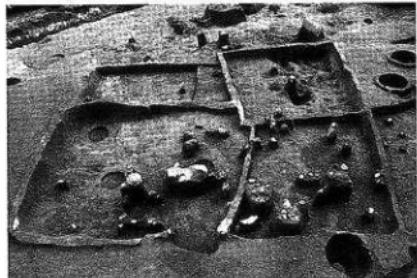
##### 50 号竪穴住居址

43 号竪穴住居址の南に隣接して検出された。東半分は 52 号竪穴住居址に切られている。軸は南北より少し西に振れている。現状では縦 3 m、幅 2 m、深さは 20 cm 程度である。硬化した床面や柱穴などは確認されなかった。住居に明確に伴う遺物が少なく時期決定は困難であるが、当該期の遺構のなかでは早い段階のものである。

##### 52 号竪穴住居址

検出当初は 4 基の竪穴住居址が切り合っているものとして掘り下げをおこなったが、遺物や散在する炭の状況から 1 基の竪穴住居であると判断した。軸はほぼ南北を向いており、縦 6 m、幅 6.2 m、深さ 20 cm である。硬化した床面が一部で確認できた。床面には炭が一面に散在していた。ただし、木炭などの建築部材を示すようなものは無く、焼失住居とは考えられない。遺物は土器とともに須恵器がある。

写真 21 52 号竪穴住居址（北より）



##### 310 号竪穴住居址

I 区調査時にはプランを把握することができなかったが、II 区にかかる部分を調査して住居址であることを確認

写真 22 310 号竪穴住居址（北より）



認した。軸は南北を向いており約6m四方のプランであったと考えられる。住居址の中央部分で硬化した床面を確認した。柱穴は検出できなかった。

#### 290・291号竪穴住居址

調査区中央の北端で検出した。既に北側の大半を削平されており、上面もかなり削られていた。どちらも軸は南北を向いている。硬化した床面や柱穴などは確認されなかった。遺物も少なく碎片ばかりである。

写真23 290号竪穴住居址（南東より）



写真24 291号竪穴住居址（南東より）



写真25 297号竪穴住居址（西より）



#### 297・355号竪穴住居址

これらは290・291号竪穴住居址の南に軸を描えて検出された。297・355号住居址はそれぞれ291・290号住居址に切られており、また搅乱によって北側のプランは不明である。297号住居址は幅6.4m、355号は幅5.4m、両者とも上面の削平が著しく、深さは10cm足らずである。72号溝が埋没したのちに造営されている。297号住居址では硬化した床面が確認された。297・355号とも竪の跡と思われる焼土が確認されたが、297号は東壁、355号は西壁に作られている。支柱などは確認されなかった。

写真26 355号竪穴住居址（南より）



#### 古代II期の竪穴住居址

##### 25号竪穴住居址（図10）

80・30号竪穴住居址と重複して検出された。軸は南北方向より若干東に振れています。縦2.5m、幅3.2m、検出時の深さは20cmである。住居址中央で硬化した床面が確認された。床面には遺物や焼土、砂岩のブロックが散在していた。南東隅に焼土や粘土の入った浅い掘りこみが検出され、精査した結果竪の支柱が確認された。

写真27 25号竪穴住居址遺物出土状況（北西より）



遺物は土師器と須恵器が出土した（図11）。図中の13～16・18はこの時期のものとしては古く本来は80号竪穴住居址に伴うものと考えられる。土師皿のなかに墨書

図 10 25・300 号竪穴住居址実測図 (1/50)

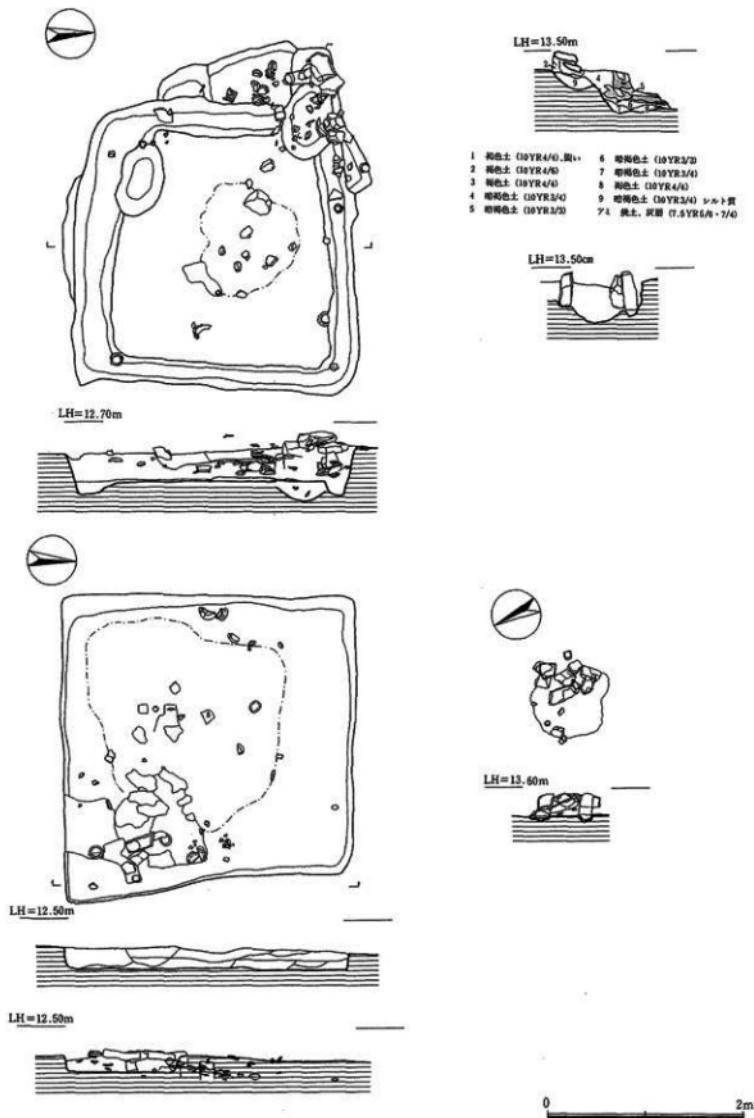
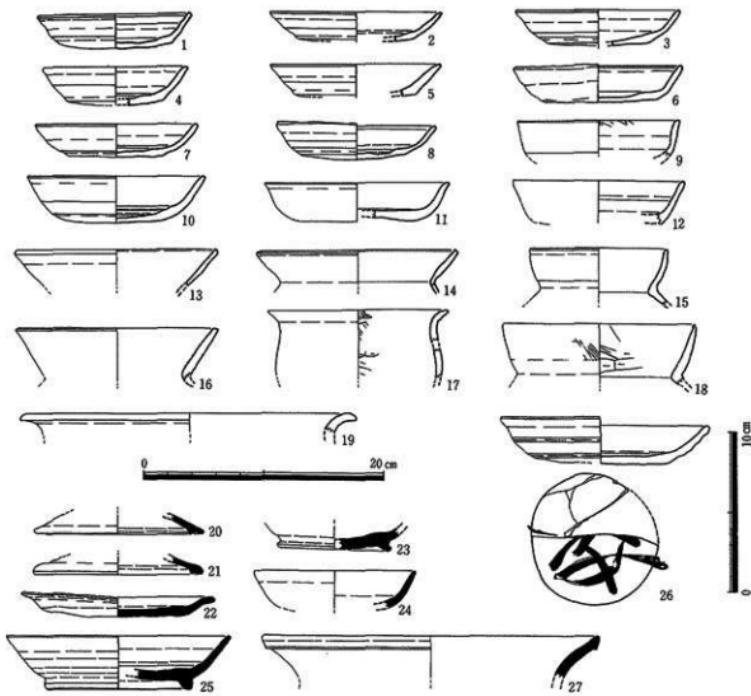


図 11 25号竪穴住居址出土遺物実測図 (1/3・1/4)



を持つものが含まれていた。8世紀末から9世紀前半が住居址の設営時期であろう。

写真 28 25号竪穴住居址竈 (北西より)



300号竪穴住居址 (図 10)

調査区北側の中央で検出した。軸は南北を向き、3m

四方である。検出時の深さは50cmである。東壁に一段浅く張り出す部分があるが、これは南東隅に設けられた竈に伴うものと考えられる。住居址の中央では硬化した床面が確認されたが、柱穴は検出されなかった。また、

写真 29 300号竪穴住居址 (西より)

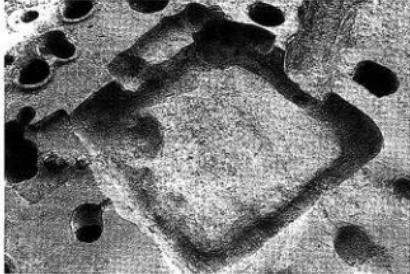
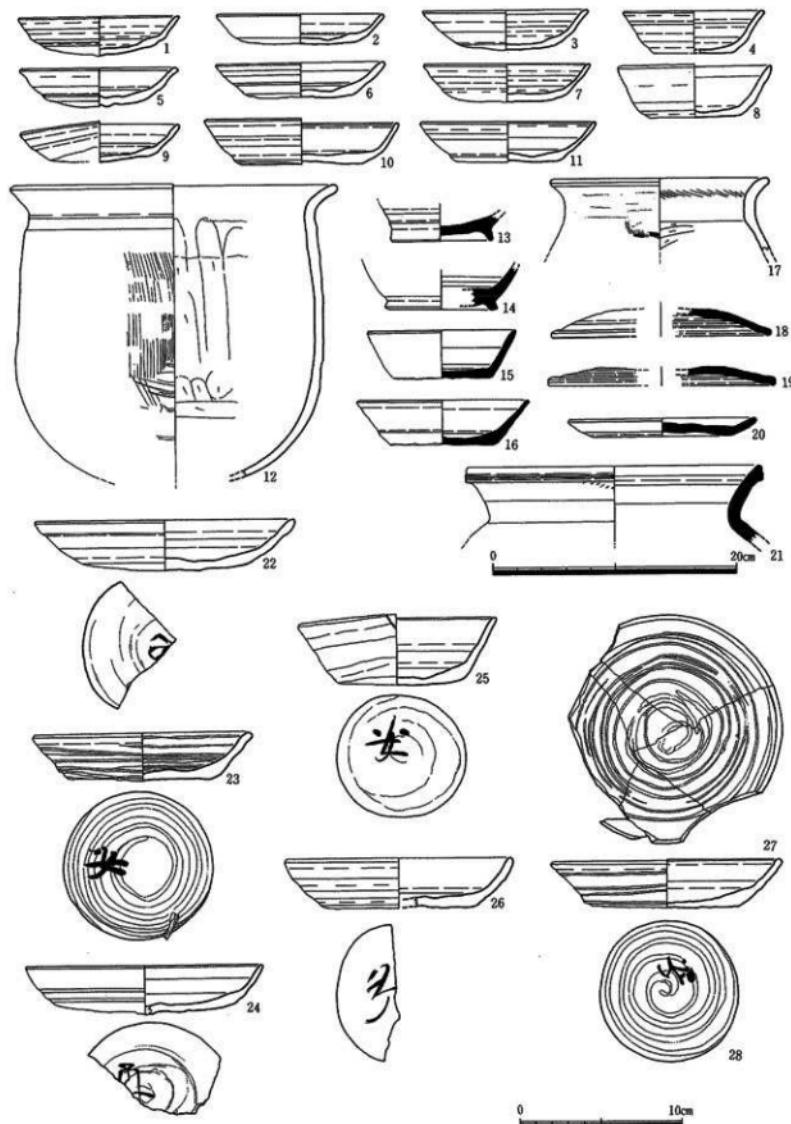


図 12 300号竪穴住居址出土遺物実測図 (1/3・1/4)



床の周囲には壁にそって幅20cm深さ15cmの溝が廻らされている。

遺物は土師器と須恵器が出土した(図12)。6枚の土師皿には墨書きがあった。このうち23・25・28は同じ文字であるが、筆跡は全く違っている。これらも8世紀末から9世紀前半の遺物である。

写真30 300号竪穴住居址(西より)



157号竪穴住居址

調査区の北西隅で検出した。北側と西側が調査区外に延び、東側は排水管によって既に破壊を受けているため全体のプランは確認できなかった。床面には土師器や須恵器などの遺物が散在していたほか、硬化した床面も確認できた。調査区の北側の壁に竈が露出していた。精査した結果支柱などが確認された。9世紀前半の設営と考えられる。

258号竪穴住居址

360号竪穴住居址と重複して検出した。東半分が既に削平されていた。現状で縦3.6m、幅3mで軸は少し西に振れる。住居の中央では硬化した床面を確認したが、柱穴は不明である。住居址の方向が360号住居址と同じであるが、500号掘立柱建物を切っており、時期は8世紀後半以降である。詳細な時期は遺物の検討を待ちたい。

写真31 157号竪穴住居址(東より)

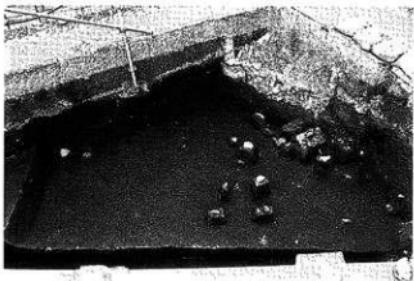
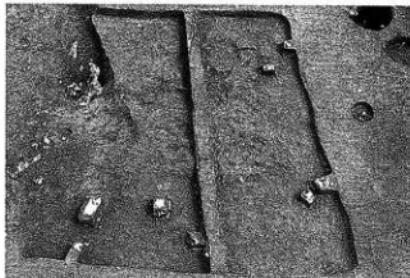


写真32 258号竪穴住居址(北より)



〈掘立柱建物址〉

今回の調査で6棟の掘立柱建物址が確認された。いずれも軸は南北方向である。500・501号以外は、調査区の北西側外に広がっており、全体の確認は出来なかった。

500号掘立柱建物址(図13)

II区北側中央で検出した。南北に軸をとる桁行5間、梁行3間の掘立柱建物である。72号溝が埋没した後355号竪穴住居址の上に設営されている。柱間は桁行・梁行とも1.8m~2mである。柱穴は径が55cm~70cm、柱痕は径25cmである。検出面からの深さは30cm~80cmである。遺物が乏しく詳細な時期決定は難しいが、建物の方位から8世紀後半以降と考えられ、355号竪穴住居址を切る事から8世紀代も終り頃の可能性があろう。

501号掘立柱建物址(図13)

500号掘立柱建物址の4mほど西側で検出された。500号と軸を描えている。南側が擾乱のため不明だが、500号と同じ3間×5間の建物であったと思われる。調査終了後に認定した。柱間は1.8m~2m、柱穴は径が55cm~8cm、柱痕は径約25cm、検出面からの深さは30cm~50cmである。設営時期は500号と同じ頃と思われる。

写真33 500・501号掘立柱建物址(北より)

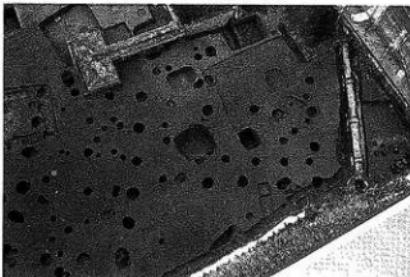
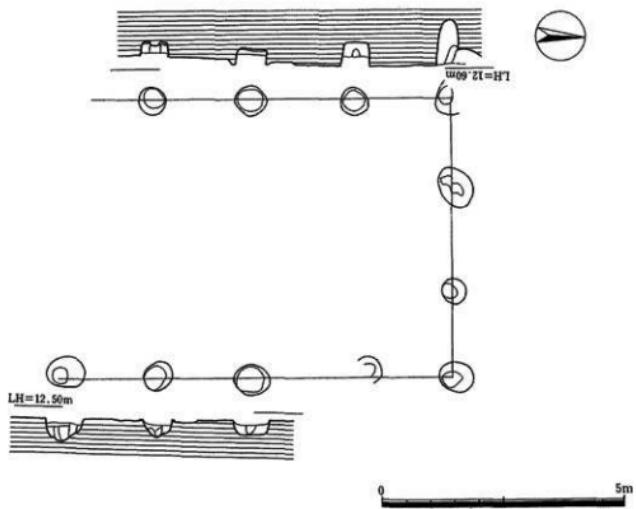
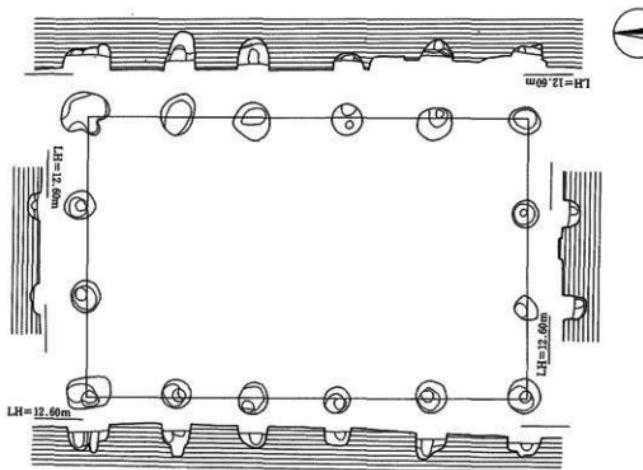


図 13 500・501 号掘立柱建物址実測図 (1/100)



### 502号掘立柱建物址

355号竪穴住居址と500号掘立柱建物址と重複して検出した。北半分が調査区以北に延びるため全体は不明である。桁行3間以上、梁行3間の建物である。調査終了後に認定した。軸は南北をとり500号と向きを揃えている。柱間は桁行が約1.9m、梁行が約2.3mである。柱穴は径が50cm～80cm、柱痕は15cm～20cm、深さは50cm～60cmである。355号住居址を切っているが500号との前後関係は判断し難い。

### 503号掘立柱建物址

調査区の北側中央付近で検出した。調査終了後認定した。北側が調査区外に延びるのか不明である。現状では桁行4間、梁行2間である。軸は南北を向いており上記の掘立柱建物と方向を揃えている。柱間は桁行で1.9m～2m、梁行で1.9m、柱穴は40cm～70cmである。

その他掘立柱建物となると思われるピットが4棟分あると認識している。いずれも南北方向を向くが503号に重複する504号（現状1間×5間）は軸が東に振れている。

### ＜その他の遺構・遺物＞

#### 胞衣臺（図14）

30号竪穴住居址の北壁外で検出した。土器の蓋に須恵器の蓋をしていった。中には土の流入もなく、密閉状態が保たれていた。8世紀後半のものと思われる。

図14 115号胞衣臺・250号土壙墓（1/4・1/40）

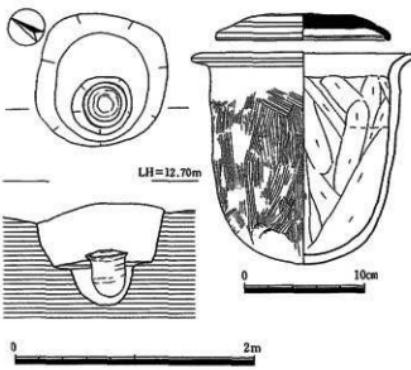


写真34 115号胞衣臺（西より）



土壙墓（図14）

II区において1基土壙墓が検出された。4号溝の西端付近である。1/3程現代の建物の基礎工事により破壊されまた骨の依存状態も良好とはいえないが、埋葬の様子は確認できる。頭位は北で仰臥しており、足は軽く曲げていたと思われる。胸部あるいは腹部で手を合わせていたようだ。副葬品としては左肩付近から刀子が1本と右ひじ部分から土師器の小皿1枚が出土した。

#### 祭祀遺構

4号溝の調査区中央付近の底で、馬と思われる動物の頭部骨が検出された。水に関する祭祀が行われたと思われる。

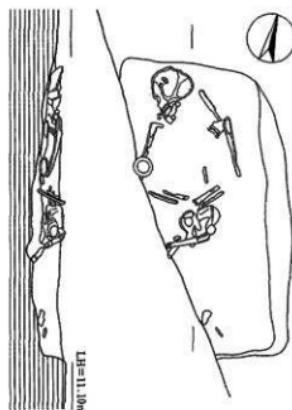


写真 35 250号土壤墓（南より）

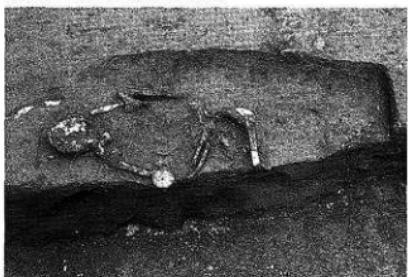
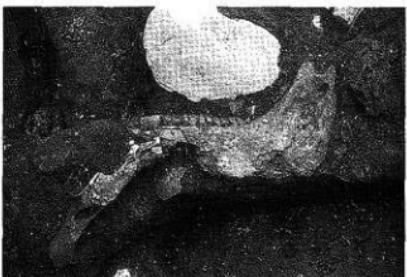


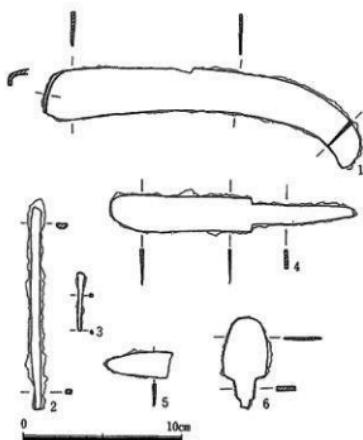
写真 36 馬骨出土状況（西より）



鉄製品（図 15）

6点の鉄製品が出土した。錐、釘、刀子、鎌がある。

図 15 鉄製品・土鏡・玉類実測図（1/1・1/3・2/3）



る。4は土壤墓の副葬品である。

#### 土製鏡（図 15）

遺構検出時に 297号竪穴住居址付近で出土した。径が約4cm程度である。鏡の部分を摘み上げてつくり、穴を一方より穿っている。

#### 玉類（図 15）

平玉（8）と垂玉（9），白玉（11），ガラス製小玉（10）が出土した。

平玉は径 2.65cm，厚さ 3mm，孔径 2mm の穴を二つ開けている。

白玉は長さ 4mm，径 7.3mm，孔径 2mm である。滑石製。

垂玉は長さ 10.5mm，最大幅 10.3mm，厚さ 4.65mm である。不定形な台形をしており、垂飾出来るように 2mm の穴を開けている。薄い緑と濃い緑のまだら模様である。結晶片岩様綠色石材と思われる。

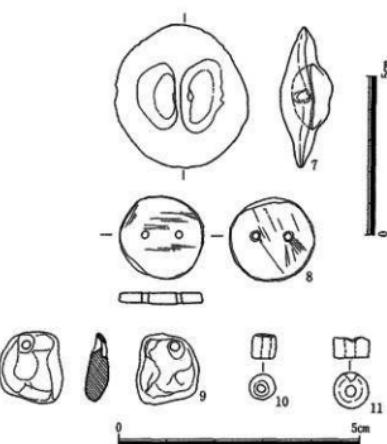
ガラス製小玉は長さ 4.9mm，径 5.2mm，孔径 1.7mm である。コバルトブルーである。

#### 石器（図 16）

35号竪穴住居址付近の地山層から縄文時代の黒曜石製の石鏡と剥片が出土した。

#### 4. 成果と問題点

1996年に本荘北地区で行われた調査（9601調査地点）で、初めて古墳時代前期の竪穴住居址が確認された。それは 9601 調査地点の最も西に位置しており当該期の遺



構は西側に広がるものと予想されていた。本調査ではその予想通りに古墳時代前期の遺構が検出され、遺物も良好な状態で量的にも恵まれて得られたことは大きな成果である。

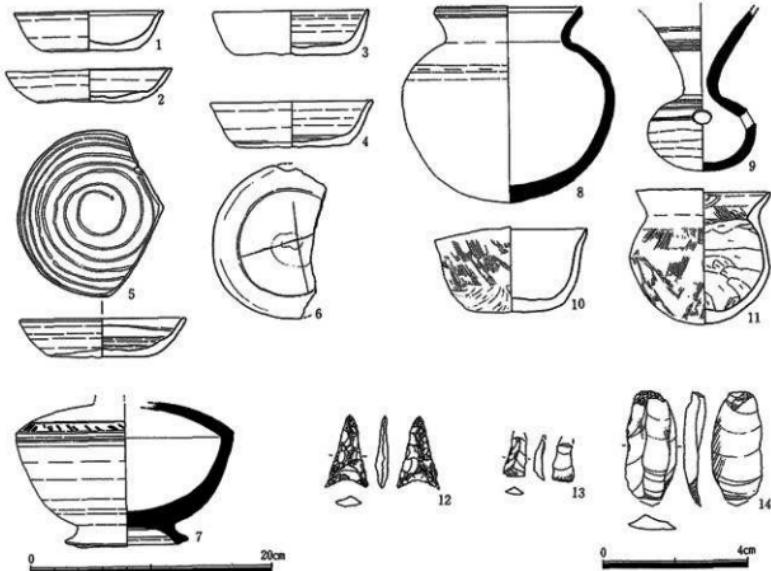
遺構については9807地点において条里施行以前（7世紀代～8世紀初頭）・以後（8世紀後半～）の建物の方向性が確認されたが本調査ではさらに遡る時期の方向性を確認できた。さらに古墳時代の遺構の中で最も古いと考えられる3・5号竪穴住居址と同じく古墳時代の竪穴住居址である35・113号等とでは建物の軸がずれており、古墳時代から古代にかけての時期においても細分が可能のようである。規模にも大小があり、方位や規模についての検討が今後の課題である。

遺物についても幅広い時期の遺物が出土した。特に古

墳時代前期の遺物は本荘地域の当該期の研究に先鞭をつけるものである。また昨年度から行っているウォーターセバレーション（水洗選別）でも、炭化した米等が発見されており、成果をあげている。今回提示できた遺物は出土遺物の1割程度のものである。遺構に伴うという好条件に恵まれており、遺構の細分のためにも整理・精査が望まれる。

前年度末に行った本調査の事前工事に伴う立会において（9807調査地点）、竪穴住居址を確認しており集落はさらに西へと広がる。一方8世紀後半以降の遺構も東・北の調査区外へ延びており、白川に沿って9601調査地点付近まで広がることが予想される。今後、これらのことと留意して調査に臨みたい。

図16 その他出土遺物実測図（2/3・1/4）



## II-2 9907調査地点

### 1. 遺跡の立地と周辺遺跡

本学の文学部・法学部・教育学部・大学教育センター(旧教養部)・工学部・理学部の所在する黒髪地区は、周知の黒髪町遺跡群(熊本市遺跡地図No.8-88)内にある。阿蘇南郷谷に発した白川は水年の土砂運搬と増水・氾濫を繰り返して熊本平野を形成し、中流域では両岸に河岸段丘を発達させている。白川は大学付近で小刻みに蛇行しやがて穢やかに下流域へと下る。本遺跡は白川右岸に展開する河岸低位段丘上(標高18~25m)、立田山(標高151.6m)の南山麓部に位置する。

周辺遺跡としては、小峰遺跡、黒髪町下立田遺跡群、カブト山遺跡、龍田塚内遺跡などが、白川を挟んだ対岸には渡鹿遺跡群や新屋敷遺跡、大江遺跡群が所在している(図1)。

### 2. 調査の概要

年度当初には計画されていない事業であった。平成10年11月初めに工学部より、実験用プレハブを取設したいと依頼があった。しかし年度末についた補正予算により急遽理学部自然科学等総合実験棟新営に係る調査

写真37 調査区全景(南より)



(9810)を優先して行い、この調査終了後に医学部附属病院病棟新営工事に係る調査(9901)を実施することとなった。理学部の調査は年次報告書の作成期間中であつたため一部の業務を委託して小畠が調査にあたり、また病棟新営工事は調査面積から推して調査員一人では半年以上かかると予測され、調査期間短縮のため小畠・大坪が二人で現場に係らなければならず、プレハブ取設に伴う調査は上記の調査が終了するのを待って実施された。

9月17・20日両日で一次掘削を終了し、9月22日より作業を開始した。期間中、大きな被害をもたらした台風の通過があった。そのような困難のなか参加していただいたい作業員の皆様には感謝いたします。

#### 〈調査面積〉

136.5m<sup>2</sup>

#### 〈調査期間〉

1999年9月22日~10月5日

#### 〈調査者・参加者〉

大坪志子。

岡田イツ代、押方富江、河野義勝、小細工洋子、白石亞紀、白石美智子、高松北子、瀬潤俊子、番山明子、福田久美子、堀川貞子、松井昭子、水上順子、村上幸子、森田ミドリ。

図 17 黒髪南地区における調査地点配置図 (1/2000)

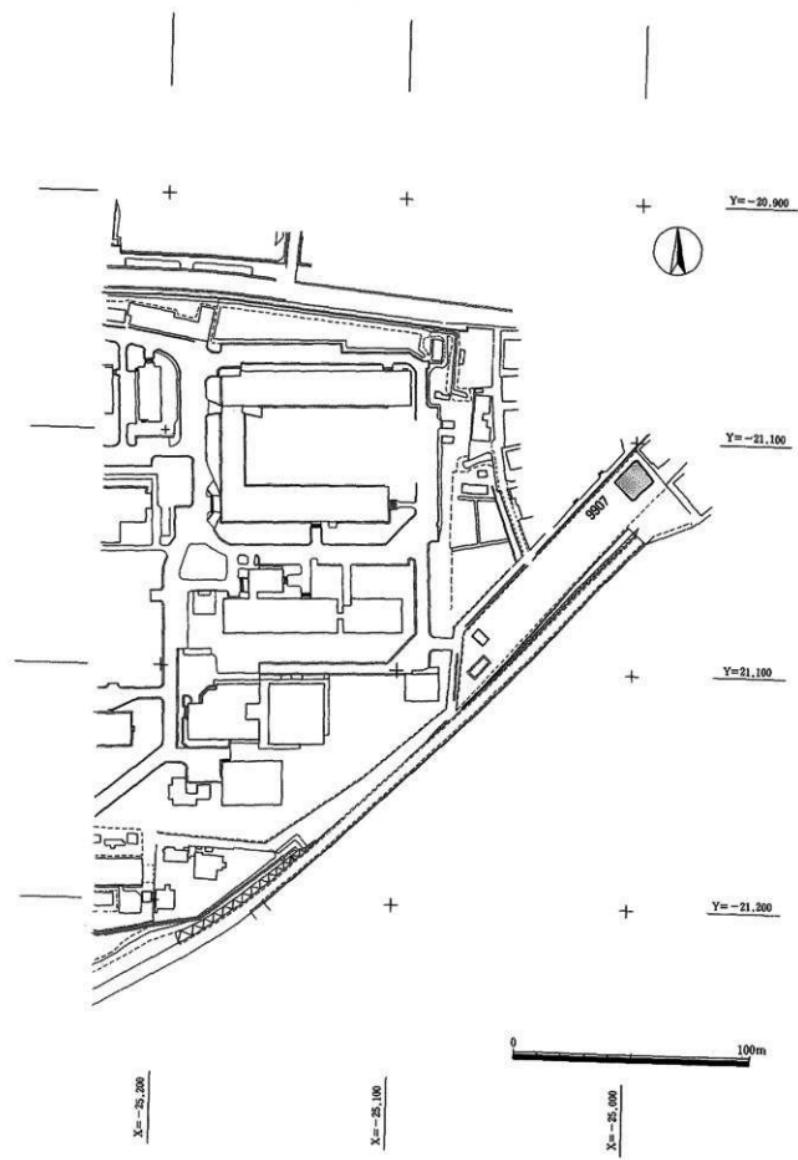
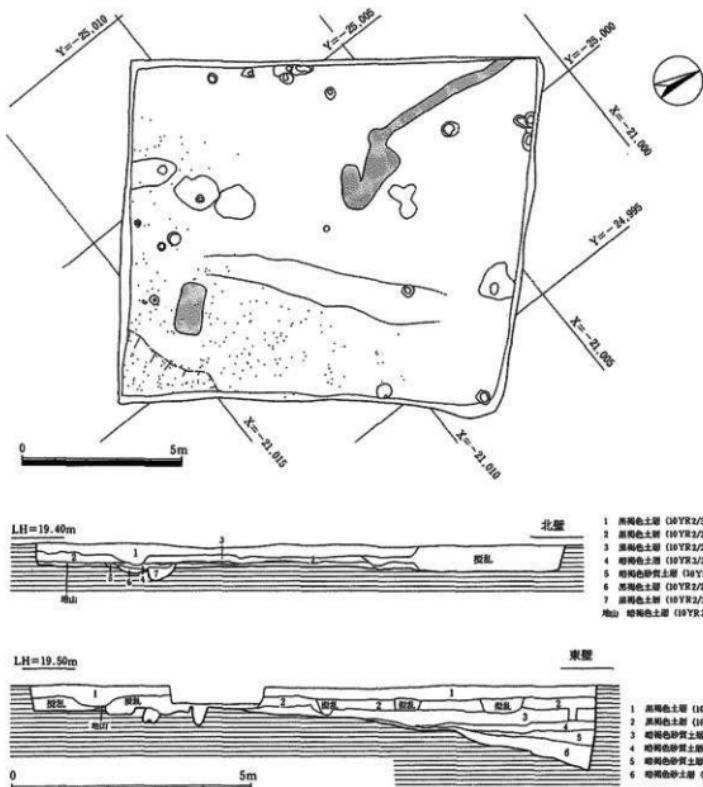


図 18 9907 調査地点遺構配置実測図・壁土層断面実測図 (1/150・1/100)



### 3. 調査の結果

#### a 基本層序

今回調査したのは、白川右岸の標高19m前後の地点にある。南側には堤防が控え、すぐに白川の流れとなる。調査対象地は以前に工友寮という学生のための寮施設があった跡地である。基本層序は以下のとおりである(図17)。

I層(黒褐色10YR2/3)・II層(黒褐色10YR2/2)は現代埋土および跡地整備時の客土であろう。III層(暗褐色10YR3/4・厚さ30cm)は他の調査地点において通常地山層と呼称している遺構が掘込まれる層である。きめ細かく粘性の少ないきれいな土である。縄文時代の遺物

包含層もある。IV層(暗褐色10YR3/4・厚さ20cm)は土の質はIII層と同じである。色調の表記では同一となるが、III層と比べると赤味が強く鮮やかなオレンジ色といいう感じである。縄文時代の遺物も若干含まれていた。V層(暗褐色10YR3/4・厚さ30cm)はIII・IV層に似た土に砂岩ブロック(にぶい黄褐色10YR4/3・厚さ10~30cm)が入る。遺物は含まれない。VI層はV層の土に多量の川砂が入る。

地山はV層に入るブロックが基盤となる土で、黒堀北地区の9802調査地点において、調査区の南側半分で検出された地山と同じである。9802調査地点では、この地山上で縄文時代早期の押型文土器が多量に出土した。

本調査地点では一部を除くと地表面下50cmで地山となり、これまで調査された黒髪南地区の様子と比較する都非常に浅い。

#### b 検出遺構と遺物

本調査地点は、地山の遺構検出面までの土が現代埋土であり、工友寮の建設と解体・整地の際に削られたようで、地山は本来もう少し高かったものと思われる。今回の調査では、10個程度のピットと旧河川敷につながるかと思われる落ち込みを一部確認したほかは、遺構は検出されなかった(図17)。M4・M5ピットから縄文土器が出土した。これらと同じ埋土をもつピットも同様な時期と考えられるが、これらが柱穴などを示すような規則性はなく、その他遺構と思われる掘込み等は伴わない。

地山は調査区の南隅にむかって傾斜しており、Ⅲ層・IV層はこの落ち込み部に堆積していた。遺物が分布する範囲を堺に白川に向かって緩やかに傾斜し、図17中に

写真38 調査区南隅傾斜部分（北より）



示した傾斜変換線から急激に深く落ち込んでいた。

VI層以下は川砂と円礫が多量に入っていることからこれらは炉などの遺構ではないと思われる。傾斜がやや急激ではあるが旧河川の作用

写真39 縄文土器出土状況（北西より）



により堆積した層で、あるいは昔の河川敷につながるものではないと考えられる。遺物は縄文土器が出土した。包含層であるⅢ層とIV層の広がりに対応して調査区の南隅に集中して分布している。

出土した土器は碎片が多く、部位や器種まで判別できるような良好な資料は少ない。前期から晩期までの土器がある。

図18の1～3は無文の土器で、3は口縁に刻目がある。4～26までは条痕文をほどこす縄式土器である。30・32は無文の土器底部である。時期は判定し難い。28は御手洗式、34・35は北久根山式系の土器であろう。34は口縁径が小さく壺の頸部のような形態で、須恵器の高杯の脚部に見られる四角形の透かしのような穴を内側から穿っている。36は後期の三万田式土器である。37は「く」の字に強く外反した口縁部で、条痕を施しておらず器面は内・外側とも良くなめられれている。38は刻目突帯の部分である。

出土した全ての土器の詳細については検討の途中であるが、現在のところ前期の土器も晩期の土器もⅢ層からあるいはIV層から出土しており、層位的に時期を分離することはできない。Ⅲ層に遺物が集中しており、時期も分離できないため、Ⅲ層は2次的な堆積によるものであろう。

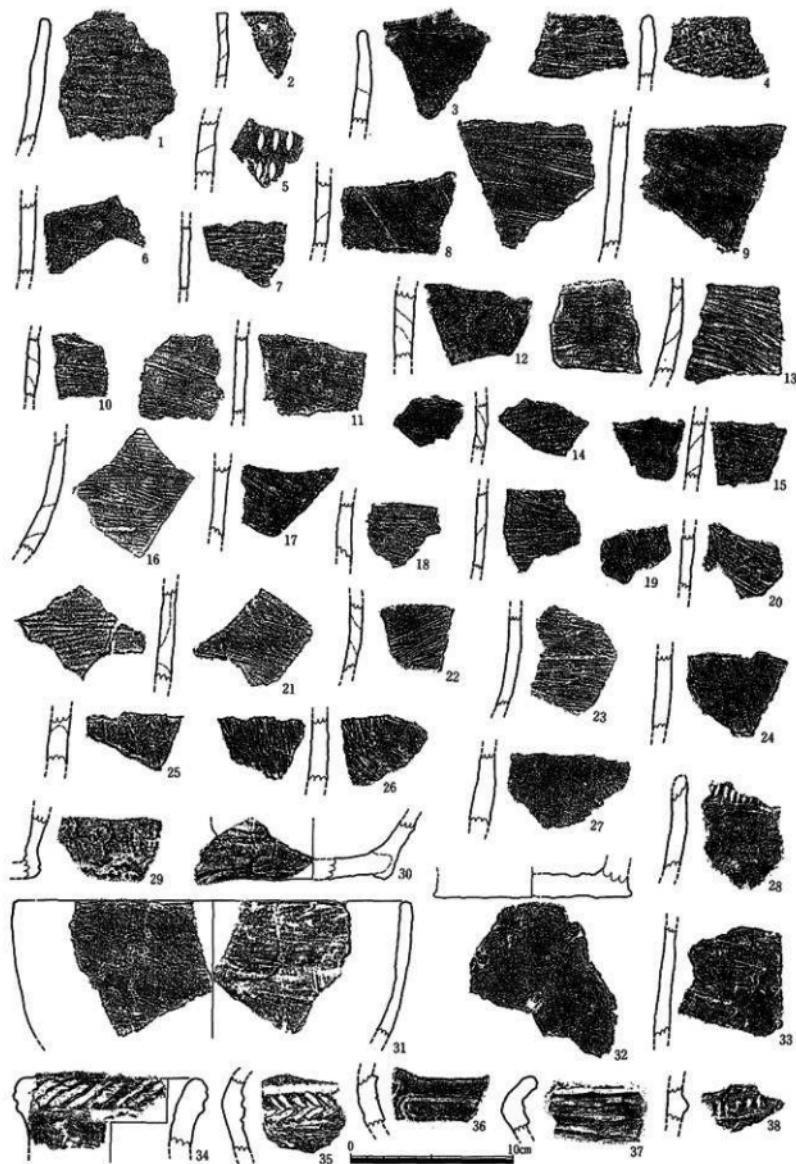
#### 4. 成果と問題点

今回の調査では、遺構の検出がなく遺物の出土も少なかった。

9802調査地点では、地山層と認識している黄褐色土層に縄文土器が含まれることを確認した。砂岩ブロックを含む基盤の層の上に堆積している黄褐色土層の上部には縄文晩期の土器が含まれ、また下方(基盤の層の直上)では縄文早期押型文土器が多量に出土した。本調査区でも同様であった。9802地点の黄褐色土層と本調査地のⅢ・IV層は同じ層として調査したが、Ⅲ・IV層からは前期を過る資料はなく、遺物の様子から二次堆積層のようである。V層は基本的に地山とIV層との漸移層と考えるが、V層からの遺物の出土もなかった。9802・9907の両地点を直接的な比較は難しいが、この縄文時代の遺物包含層は早期とそれ以降の時期に大別できる可能性はあると考える。

調査地点により若干の差異があるが、今後の調査ではこの黄褐色土層に掘りこまれた遺構の確認・調査とともに、縄文時代の遺物・遺構の確認を今まで以上に意識しなければならないであろう。

図19 9907調査地点出土遺物実測図 (1/3)



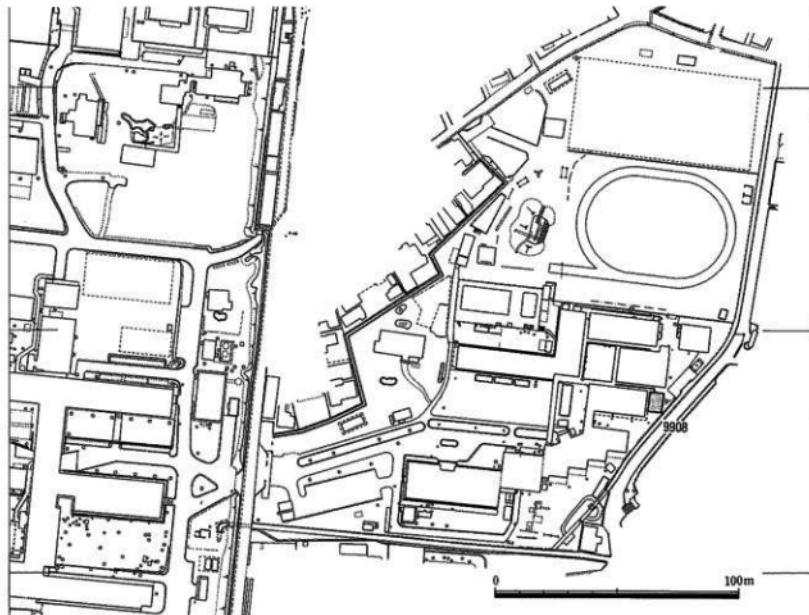
## II-3 9908 調査地点

### 1. 遺跡の立地と周辺遺跡

本学の法学部・文学部・教育学部・大学教育センター(旧教養部)・工学部・理学部の所在する黒髪地区は、周知の黒髪遺跡群(熊本市遺跡地図No.8-88)内にある。遺跡は熊本平野北西部に聳える立田山(標高151.6m)の南山麓部、白川右岸に展開する河岸低位段丘(標高18~25m)上に位置する。熊本平野南部は、阿蘇南郷谷に水源をもつ白川の運搬した土砂が扇状地形に堆積した砂礫層を基盤としており、本遺跡は位置的にその扇状地の要の部分に相当する。

周辺遺跡としては、背後の立田山裾に小峰遺跡、黒髪町下立田遺跡群、カブト山遺跡、龍田陳内遺跡などが、白川を挟んだ対岸に、渡鹿貝塚・北原豪塚遺跡を擁する渡鹿遺跡群や新屋敷遺跡、大江遺跡群などがある(図1)。本調査区は黒髪東地区の東端にあたる。

図20 9908 調査地点位置図(1/2000)



### 2. 調査の概要

今回の調査は教育学部附属養護学校の給食室の増築に伴う発掘調査である。養護学校側と協議の上、11月24日より発掘調査を実施することとした。

#### 〈調査面積〉

42m<sup>2</sup>

#### 〈調査期間〉

1999年11月24日・25日

#### 〈調査員・参加者〉

小畠弘己。

黒木重信、黒木タケ子、古賀敬子、白石美智子、白石重紀。

### 3. 調査の成果

#### a 基本層序

調査地の基本層序は、以下のとおりである。

I層-表土(厚さ100cm), II層-青灰粘土層(厚さ30cm), III層-白灰色粘土層(厚さ50cm), 以下疊混じり粘土層。

### b 検出遺構と遺物

今回の調査は調査面積が狭いため、南側と北側の2つに分けて調査を実施した。埋土であるⅠ層を除くと灰白色の粘土層（Ⅲ層）が現れ、部分的にⅢ層が堆積していた。Ⅲ層中より染付磁器片1点を検出したが、遺構らしきものは認められなかった。両地区にトレンチをそれぞれ1本ずつ設定して深掘したが、地表下2mくらい下まで砾や砂混じりの粘土層が堆積しており、この時点で調査を断念した。出土遺物は磁器1片以外にない。おそらく近世以降の所産であろう。

写真40 調査風景（北より）



写真41 トレンチ1（南より）



### 4. 成果と問題点

今回の調査では、近世以前に遡る遺構や遺物は検出できなかった。砂礫や粘土層で形成される本地点の土層の堆積状況は、以前に実施した9708地点の調査成果と同じく、本地点が以前の谷の一部にあたることを示している。この地点がいつ埋められたのかに関しては、西側に展開する古代集落との関連において、古地形を復元する上で重要な情報であるが、今回は調査面積も狭く、深掘りが不可能であり、明らかにできなかった。今後の課題としたい。

写真42 Ⅲ層出土状況（南より）



写真43 トレンチ2（北より）



## II-4 9909調査地点

### 1. 遺跡の立地と周辺遺跡

本学の法学部・文学部・教育学部・大学教育センター(旧教養部)・工学部・理学部の所在する黒髪地区は、周知の黒髪遺跡群(熊本市遺跡地図No.8-88)内にある。遺跡は熊本平野北西部に聳える立田山(標高151.6m)の南山麓部、白川右岸に展開する河岸低位段丘(標高18~25m)上に位置する。熊本平野南部は、阿蘇南郷谷に水源をもつ白川の運搬した土砂が扇状地形に堆積した砂礫層を基盤としており、本遺跡は位置的にその扇状地の要の部分に相当する。

周辺遺跡としては、背後の立田山裾に小峰遺跡、黒髪町下立田遺跡群、カブト山遺跡、龍田陳内遺跡などが、白川を挟んだ対岸に、渡鹿貝塚・北原壺棺遺跡を擁する渡鹿遺跡群や新屋敷遺跡、大江遺跡群などがある(図1)。本調査区は黒髪南地区の南西端で自然堤防が白川に最も突き出した部分にある。

### 2. 調査の概要

今回の調査は平成9年度補正予算によって年末に急速浮上した事業である。建築課と協議の上1月7日に試掘調査を実施し、その結果畠跡の存在が確認され、要調査

との回答を行った。1・2月は年次報告書作成のため調査の実施が困難であったが、2月中旬より調査を開始することとした。

遺構面までの掘削作業の終了を待って、2月14日より重機による遺構面検出・擾乱除去を行い、次いで作業員を投入した。現在1面目の遺構である畠跡を調査中であり、ここではこれまでの概要を報告し、以後の結果については次年度に報告予定である。

#### 〈調査期間〉

2000年2月14日~3月24日

#### 〈調査面積〉

1,853m<sup>2</sup>

#### 〈調査員・参加者〉

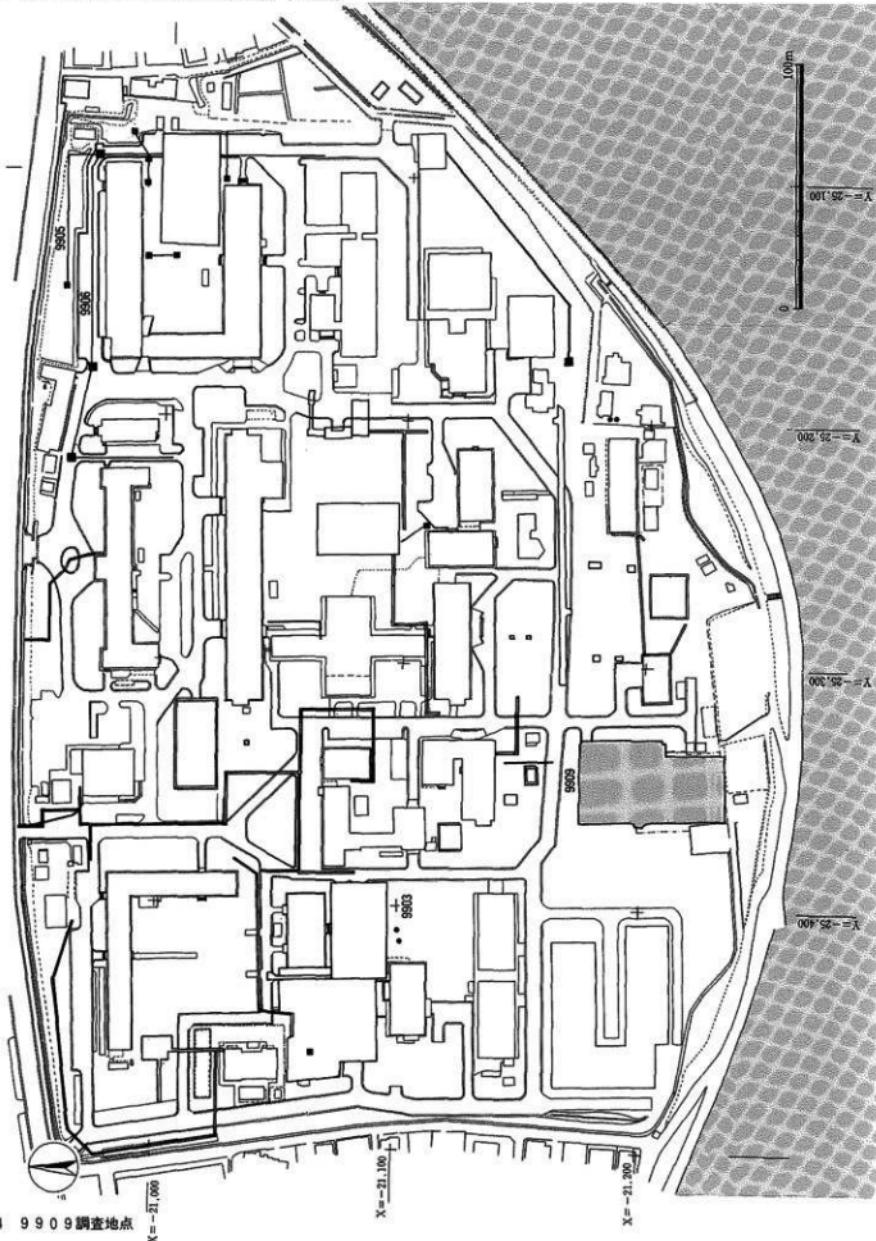
小畠弘己。

内田美穂、卯野木亜紀、岡田イツ代、岡村久美子、押方富江、河野義勝、熊本茂仁、黒木重信、黒木タケ子、古賀敬子、小細工洋子、坂口三輝子、坂元紀乃、白石美智子、鈴木笙子、高橋久美、高松北子、田代理恵、瀧潤俊子、橋口剛士、早田咲百合、番山明子、福田久美子、堀川貞子、松井昭子、丸山愛、三浦和之、水上順子、宮本千恵子、村上幸子、森川征子、森川謙、森田ミドリ、安武寛文、矢羽田幸宏。

写真44 調査風景(北東より)



図21 黒髪南地区における調査地点配置図 (1/2000)



II-4 9909調査地点

X= -21.000

X= -21.100

X= -21.200

図 22 9909 地点造構配置実測図 (1/300)



### 3. 調査成果

#### a 基本層序

調査地は駐車場として利用されていた。このため調査区は旧建物の基礎部分を除き、きわめて遺構の残り具合が良好であった。土層は大きく15枚に分けられる。河川に近い位置にあるため、土層の堆積が著しく、最初の遺構検出面Ⅶ層上面までの深さがおよそ2mに達する。

- I層(厚さ1m)…現代埋土およびバラス
- II層(厚さ60cm)…昭和28年白川洪水の際の砂層
- III層(厚さ40cm)…暗茶褐色土層(近代理土層)
- IV層(厚さ20cm)…灰暗褐色土層(近代耕作土層1)
- V層(厚さ20cm)…暗茶褐色土層(近世後期耕作土層)
- VI層(厚さ10cm)…淡緑灰色砂層(近世中期洪水砂層)
- VII層(厚さ40cm)…茶褐色土層(近世中期耕作土層)

#### b 検出遺構と遺物

I区とした南側はその半分が旧建物によって搅乱されており、またこの地区はVI層の被覆がなかったため、烟の歯を明確に捉えることができなかつた。よって北側のII区(1,200m<sup>2</sup>)においてのみ良好な烟の歯遺構を検出できた。

Ⅶ層面が近世の烟の面であり、歯200条余りを検出した。このⅦ層面は洪水によるものと思われる砂層(VI層)に覆われておらず、遺構の検出は比較的容易であった。歯はおよそ30~50cm幅で、長い部分で19mほど、短いもので5mほどである。歯の高さは深いもので30cmほどであり、山部分の幅が狭いのが特徴である。単位としては南東部に5mの短いタイプが30条ほど3列に並び、その他の地区が長いタイプで構成されている。

VI層およびVII層から近世陶磁器片、釘、煙管、銅錢などがコンテナ4箱ほど出土している。近世陶磁器は大橋編年Ⅳ期(1690~1740年代)を中心とするもので、

煙管が泉編年IVもしくはVタイプ(18世紀代)、銅錢は新寛永および寛永通寶銭であり、これが示す年代は1739年以降であることから、18世紀後半の洪水によって埋没した烟と思われる。この時期の肥後藩内で発生した洪水の履歴を参考資料(表3)として付いているが、遺物の年代観からみておそらく寛政~文化・文政年間のものが該当する可能性が高い。(文化年間には、当地は烟として利用されている(図24)。

これに続くものとして、近世墓53基余がある。調査区の西よりほぼ中央に直線状をなすように配置している。以前の時期の遺構であるVII層の烟の歯境に沿って配置していること、埋土の質からV層からの掘り込みと考えられ、水没後さほど時期を経ずに形成されたものと考えられる。

最後に調査区の西側に烟とは少し方位を違えて、近代墓が形成されている。掘り込み面はIV層面であり、最も古い(確認できる限りの範囲で)もので嘉永6年の年号をもつ。ただし、この墓地は調査を行っていない。この西側の墓地は調査区の南西にある旧熊本刑務所の墓地の前身であろう。

#### 4. 成果と問題点

今回は調査途中であり、VII層面以下の状況についてはいまのところ不明である。ただし、VII層で検出した近世中期の烟の歯は、考古学的にあまり状況が把握されていない近世の烟の状況を知る上で、さらに当時の災害史を考える上で貴重な資料を提供するものといえよう。

耕作物に関しては、現在耕作土の土壤サンプルを水洗選別しているが、オムギ・マメ類が少量検出されている。土壤の水洗は一部が手についた段階であり、その全体的な成果については別の機会に報告することとする。

図23 調査区北壁土層断面実測図(1/100)

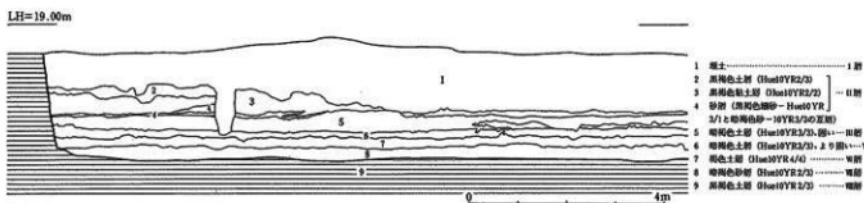


写真45 I区全景（東より）

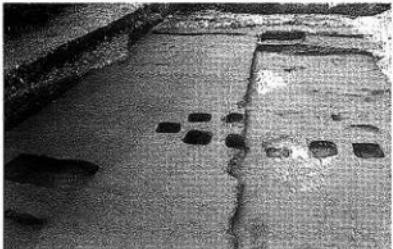


写真47 II区北壁土層断面（南より）



写真46 II区全景（南より）



写真48 鉄錢・銅錢出土状況（東より）

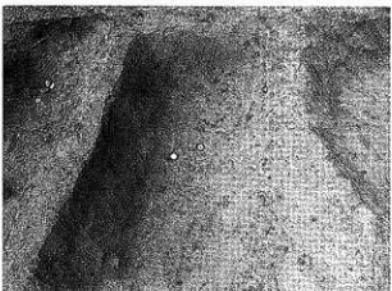


写真49 調査区全景（北東より）



表3 肥後における江戸中期～後期（元禄～嘉永年間）の水害記事  
（『熊本藩年表稿』細川藤政史研究会編 1974 より抜粋）

年号	西暦	月日	記録の内容	地域
元禄 4	1691	6.12	小川町のみ洪水、米穀多く流出（気）	小川町
元禄 9	1696	6.18	洪水、人々流出（気）	
元禄 12	1699	6.9	洪水、「玄察」に此年当国北目大洪水、大津町から土手山水にて切れ町々損する。南目は小洪水。 右の熊本古町にて3尺水揚があるとあり。本文に該当するか）	北目 古町
元禄 13	1700	5.15	甲佐川 30年未の洪水（玄察）。	甲佐川
元禄 15	1702	6.10	小川町洪水（気）。	小川町
		是年	國中水損洪水大変あり（『福岡県災異誌』に5月、6月及び8月同方面大風雨洪水の記事あり、本藩の分もその如何かに關係あるか）（肥・本）。	肥後
宝永 3	1706	6月	肥後洪水（肥）。	肥後
正徳 2	1712	6月	所々に洪水、長六橋落つ（覚）。	白川
正徳 5	1715	2.2	風雨強く塘破る（気）。	不明
享保 4	1719	5.22	肥後洪水田畠13万石余損毛（肥）。	肥後
享保 14	1729	8.19	矢部大洪水菅谷白谷社後の山崩れ神邊押波駿失（御覽）。	矢部
享保 17	1732	5.7	是日より洪水、13日迄水せず、そのため田畠腐れ害虫発生被害甚大（実紀・肥）。	不明
享保 19	1734	5.10	是日より15日迄肥後強雨洪水（家譜続）。	肥後
元文 1	1736	5.29	是夜より翌晦日にかけ強雨洪水、水損田畠5062町2反余（高56918石余）塩浜46町4反余、川塘6370間余、礎石9900間余、家屋43軒、死者22人（肥）。	不明
		是月	白川洪水にて長六橋下で馬船流れのを警留した者共へ心付を与う（年覚）。	白川
元文 2	1737	7月	諸国大洪水、本藩にて田畠6万7000石余損毛（肥）。	肥後
		10月	鶴崎洪水にて損高亢積の寄付岡山庄大夫へ達（年覚）。	鶴崎
天文 4	1739	6.17	21日まで川尻方面大洪水、男女大小79人4日間西宮寺にて養う（川尻史 291）。	川尻
天文 5	1740	3月	甲佐手永洪水に付、請販荒糞分去1ヶ年代上納御免のこと（覚）。	甲佐
延享 3	1746	6.14	洪水（年）。	不明
宝曆 5	1755	6.1	是日より9日迄強雨洪水、山崩、破損、流家死人多し、津浦弥右衛門活躍す（家譜続）。	不明
		8.5	去6日の強雨洪水の損毛23万560石と幕府に届く（家譜続・新経路覧）。	不明
宝曆 6	1756	4.17	翌18日迄強雨出水（肥）。	不明
宝曆 9	1759	3.25	大雨出水（肥）。	不明
		7.22	是日より24日迄強雨、諸川出水（肥）。	不明
宝曆 13	1763	5.28	強雨にて諸川出水（肥）。	不明
明和 3	1766	5.25	強雨洪水、球磨川1丈9尺、水俣川1丈3尺出水、田畠浸水469丁6反余、萩原堀破損1255間、修復人夫数19,507人（肥）。	南部
安永 1	1772	8月	雨降り続き田畠冠水す、為に玉名郡6手水急に飢え、救助として植方より鐵60貫目、云々（肥）。	玉名郡
安永 7	1778	7.10	肥後大風雨、洪水（本）。	肥後
天明 6	1786	6月	6月下旬より7月にかけ藩内（内田・中富・坂下・矢部手永）洪水（覚）。	矢部他
		6.29	強雨増水、白川1丈7尺、長六橋流失（肥・町目日）。	白川
		7.28	夜大洪水（氣・川尻史 291）。	川尻?
天明 7	1787	4.12	諸郡水害（寺例続）。	肥後
		8月	大風洪水（氣・川尻史 291）。	川尻?
寛政 1	1789	6月	熊本地渴水（本）。然るに6月14日より玉名方面強雨、洪水、高瀬御藏浸水、米1,767俵溢米となる（肥・覚）。	玉名・高瀬
寛政 2	1790	6月	五町手永、沼山津手永洪水（覚）。	五町・沼山津
寛政 3	1791	5.13	6月12日まで大雨降続田畠々洪水（損）。	不明
		6.9	是日より12日迄大雨、莫大的荒地出来（肥・本）、高瀬御藏浸水（覚）。	高瀬
寛政 4	1792	6.20	高瀬方面洪水（本）。	高瀬
寛政 7	1795	6.11	大洪水、京町山崎のはか一切水没（本）。	白川
		6.12	阿蘇山出水、熊本洪水（氣・肥後の風土史・熊本県災異誌）。	熊本
寛政 8	1796	5月	15日頃より雨降続、度々洪水（損）。	不明
		6.11	大雨降る、熊本大洪水（鄭慶）。	熊本
		6.12	洪水1丈6尺、練川・加勢川筋53ヶ所壊切れ、藤富村椎藤「古ボケ」を生ず、俗に「辰の年の大水」（川尻史 291）。	練川・加勢川
		10月	五町手永、宇留毛村懸竈山洪水で諸木根こげになったものの処置について（年覚）。	竈山
享和 2	1802	4.8	是日より10日まで強雨、諸川溢水（肥）。	不明
享和 3	1803	4.22	是日より5月23日まで降雨諸川増水（肥）。	不明
文化 1	1804	4.23	所々洪水（肥）。	不明
		5.14	大雨、白川溢水（肥）。	白川
文化 7	1810	3.5	大風雨にて白川石牆切れる（度譜・肥）。	白川
		3.7	強雨、諸川溢水、白川1丈5尺、球磨川1丈8尺、佐敷川1丈7尺（肥）。	肥後

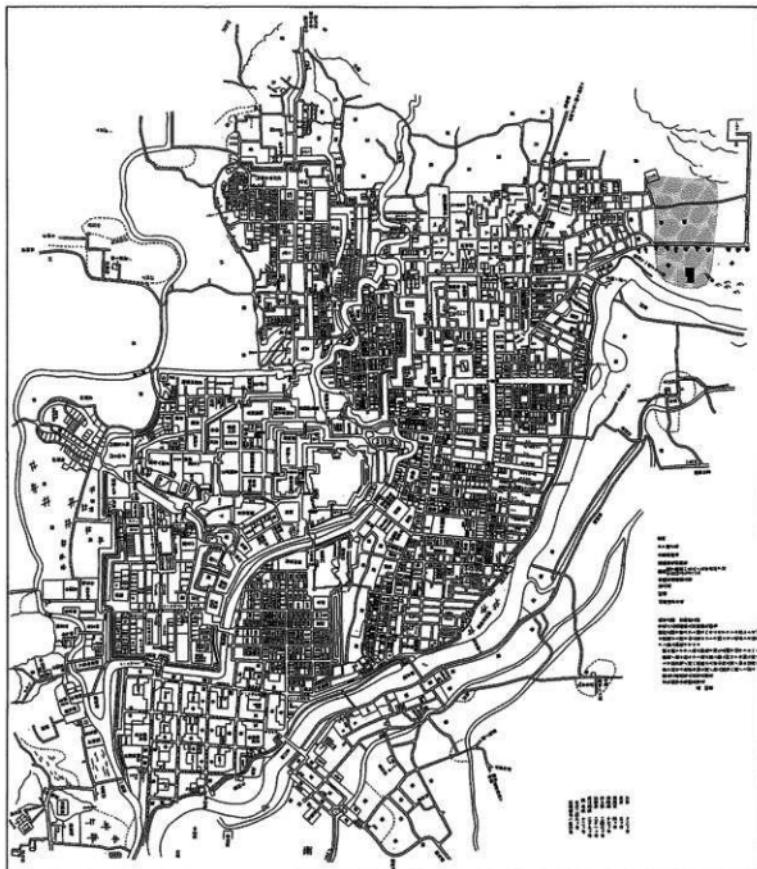
		5.18	是日より 20 日迄強雨大水 (肥).	不明
		6月	是月初より強雨大水 (本).	不明
文化 12	1815	7.6	是日より 8 日まで強雨、諸川溝水、球磨川 1丈 1尺 (肥).	球磨川 肥後
		8.12	強雨にて政廣川 1丈 1尺、山鹿川 1丈 2尺出水 (肥).	肥後
文化 13	1816	3月	月初より強雨、諸川溝水、筑中 6月 14・19 両日増水甚しく、田畠 7,819 町余水浸荒地、塘 2,234 ヶ所 27,058 町破損、溺死男女 17 人、8 月 23 日同断、溺死男女 6 人、ために田畠荒地 5,227 町余、壩破損 520 ヶ所 (肥).	不明
		6.13	強雨のため大津御藏嵐手崩あり、四五六番御蔵打崩、球磨川も大増水 (肥).	大津・球磨川 不明
		8.23	強風雨、虫入 (損).	
文政 3	1820	6.17	大雨諸川溝水、白川 1丈 2 尺、緑川 1丈 5 尺、高瀬川 1丈 6 尺、田畠 8,466 町 9 反余水浸入水浸荒崩塘 5,575 ヶ所破損 56,569 町、堤 1ヶ所倒壊、家 7軒流失。倒家 108 軒、溺死男女 12 人、牛馬 5 死、12 月 3 日此の損害を基に届け出づ (肥・本).	肥後
文政 4	1821	5.19	是日より 27 日迄大雨、諸川溝水、田畠 3,151 町余砂浸入水、塘 1,420 ヶ所破損 28,881 間、家 13 軒倒壊、湖死男女 2 人 (肥).	不明
文政 7	1824	6.26	是日より 28 日まで強風雨、大木折れ、家根、堤垣破損す、白川 1丈 2 尺余出水 (肥).	白川
文政 8	1825	8.13	強風雨被害、荒水田畠 2,371 丁、流失倒壊 347 軒 (肥).	不明
文政 9	1826	5.21	前日より大雨、高瀬川、球磨川出水 (肥).	肥後
文政 10	1827	5.19	20 日迄大雨、諸川溝水 (肥).	不明
		6.4	強雨、水損甚し (肥).	不明
文政 11	1828	5.5	大雨洪水、球磨川増水 (肥).	球磨川
		5.20	當雨、翌日大雨、緑川、球磨川増水 (肥).	南部
		5.29	29・30 日大雨溝水、白川・菊池川・緑川など (肥).	肥後
		6.7	大雨、白川・菊池川・御船川・緑川・合志川など大洪水 (本・肥)。鞍掛山崩、長六橋流失。田畠水損 7,083 丁 1 反余 (本・肥).	肥後
		6.17	大雨、白川・球磨川洪水 (肥).	肥後
		7.2	強風雨、白川・御船川・緑川・河江川・高瀬川などで出水 (肥).	肥後
		7.12	強風雷鳴白川増水。長六橋又々流失 (肥).	白川
天保 1	1830	4.22	強雨、白川出水 (肥).	白川
		6.15	大雨球磨川出水 2 丈余 (肥)、加勢川・綠川出水 (川尻史 29).	南部
		7.8	昨夜より大風雨、八代洪水、賴崎強風 (肥).	八代
天保 2	1831	5.19	上旬より梅雨、この日強雨にて八竜堀切れ、鯨・沼山津方面浸水 (肥).	鯨・沼山津
		5.26	川尻地方大洪水 (天明誌 484).	
		28・29 両日の大雨で八竜堀更に切れ、野田村延寿寺裏新筋外 4ヶ所切られ、川尻町野田杉島兩村は 57 日、横手・鏡浦・沼山津は 3~13 日、鯨手水は 20 日水没となる。田畠水損 12,850 丁、湖底 453 周、川第 48,633 周、井手串 27,392 周破損。諸官宅 20 軒、倒壊 11 軒、輕翠館宿 219 軒、町屋 904 軒、百姓家 2,545 軒流失破損、橋 565 流失、死者 17 人 (度量・肥)。川尻藏水 10,800 俵余水 (本に 8,250 俵ともいう) (肥・川尻史 316).	南部	
		6.1	球磨川出水 (肥)。晩方延寿寺供水のため倒壊流失す (肥・川尻史 315).	球磨川
天保 3	1832	6.10	洪水、加勢川槽破損、田畠水損 7,463 丁 4 反余、倒壊水損家数 1,272 軒、塙浜 38 丁 5 反余水洗刷、溺死 3 人 (肥).	加勢川
		6月	川尻地方大洪水、加勢川堰切旧にかかる (本).	川尻・加勢川
天保 4	1833	7.20	この頃噴池・合志地方強雨、諸川溝水 (肥).	北部
		8.22	この夜より翌日迄強雨、鯨手水 312 丁 1 反余水浸その他被害 (肥).	鯨
天保 5	1834	5.8	9 日迄大雨洪水、白川・球磨川出水 (肥).	肥後
天保 6	1835	4.21	24 日迄諸川溝水 (肥).	不明
		5月	下旬諸川出水、水浸田畠 12,854 丁 2 反余、死者 17 人 (肥).	不明
		6.10	洪水、水浸田畠 7,463 丁 4 反余、溺死圧死 3 人 (肥).	不明
		8.22	此夜より翌日かけ強雨、鯨手水底地の村、田畠 312 町 1 反水浸、其の他被害あり (氣・熊本県災異誌)。鯨	不明
天保 7	1836	12月	諸川洪水、諸物価騰貴、至貧の者を救恤す (本・肥).	不明
天保 8	1837	1.23	大雨洪水にて麦作数百丁水没し (肥).	不明
		3.14	大雨出水 (肥).	不明
		3.24	大雨出水 (肥).	不明
天保 9	1838	4月	下旬より 5 月下旬にかけ時々強風雨出水あり (本・肥).	不明
天保 10	1839	5.28	洪水 (肥).	不明
天保 11	1840	5.17	大雨洪水 (肥).	不明
		6月	散詫大雨、出水 (肥).	不明
天保 12	1841	4.24	強雨、諸川溝水 (肥).	不明
弘化 3	1846	4月 9	強雨、諸川溝水、白川 1丈 2 尺 (肥).	白川
		8.4	大津地方強雷雨、田畠並びに町内水溢れ、往還筋増水 4 尺余 (肥).	大津
嘉永 2	1849	5.13	川尻方面大風洪水 1丈 3 尺、19 日洪水 1丈 1 尺正中島町 56 軒のうち 40 軒庭入床あげ (川尻史 29).	川尻
嘉永 3	1850	8.7	肥後強風雨、田畠 618 丁 5 反 7 軒水没、川塘 1,747 間横切破損、百姓家 9,779 軒倒壊 (本・肥).	肥後

嘉永 4	1851	2.21	強風にて鶴手水田畑浸水、同 29 日強雨、内田・中富・南閑・板下、翌晦日蛇・大津・中村・山鹿諸手 水諸川満水、田畑浸水す（肥）。	肥後
		4.22	強雨、鶴手水田畑浸水（肥）。	蛇
		5月	洪水 6 尺（氣・川尻史 293）。	不明

嘉永 5 1852 8.22 肥後大風雨、田畑浸水（肥）。

図 24 「熊本之図」文化二年（1805）にみる調査地点の位置（△は熊本大学、黒ベタが調査地点）

〔新熊本市史別巻第一巻絵図・地図〕上 中世・近世の解説図 P28 を改変〕



## 第三章 立会・試掘調査

### III-1 黒髪南地区

(図23参照)

#### 1. 工学部研究実験棟II-2-2新営工事植樹に伴う立会調査(9903)

##### 〈調査日〉

1999年6月17日

##### 〈調査面積〉

10m<sup>2</sup>

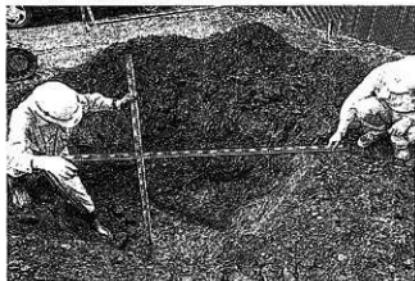
##### 〈調査員〉

小畠弘己。

##### 〈調査概要・結果〉

工学部事務棟(9603調査地点)の南側駐車場部分にあたり、先の調査所見から旧工学部運動場のため2mあまり削平を受けている可能性があった。立会調査の結果でも地表下80cmまで掘下げたが、埋土であり、遺物・遺構ともに発見されなかった。

写真50 9903地点掘削状況(北より)



#### 2. 自然科学研究科・理学部総合研究実験棟新営ガス設営工事立会調査(9905)

##### 〈調査日〉

1999年7月29・30日

##### 〈調査面積〉

50m<sup>2</sup>

##### 〈調査員〉

小畠弘己。

##### 〈調査概要・結果〉

掘削幅が50cmと狭く、また掘削部が植栽のある盛土

部分に相当するため、若干の土器片は採集できたが、遺構は検出することができなかった。

写真51 9905地点立会掘削風景(北西より)



#### 3. 自然科学研究科・理学部総合研究実験棟新営電気設営工事に伴う立会調査(9906)

##### 〈調査日〉

1999年7月29・30日、8月5日～8月7日

##### 〈調査面積〉

200m<sup>2</sup>

##### 〈調査員〉

小畠弘己。

##### 〈調査概要・結果〉

新築中の建物の電線の屋外埋設に伴う立会いである。幅1mあまり、全長200mで、地表下1mあまりの掘削深度であるため、3回に分けて立会調査を実施した。II区については工事日程の関係から、休日に調査が設定された。

全区間ににおいて、5条ほどの溝を中心とした遺構を検出した。この一番は-60cmほどで遺物包含層が現れ、遺構検出面はところによっては50cmあまりとかなり浅い部分も存在した。工事期間が切迫しており、充分な調査が行えない状況であった。部分的には掘削後に断面で溝跡を確認するなど、不手際があった。

溝はほとんどが古代に属するものと考えられ、南北方向のもの(第2～5号溝)はほぼ磁北に一致する遺構の主軸方向を示していた。I区で検出した1号溝はほぼ東西方向の主軸をとる。遺物としては古代土器片が少量出土した。

写真 52 9906 地点 I 区全景（北より）

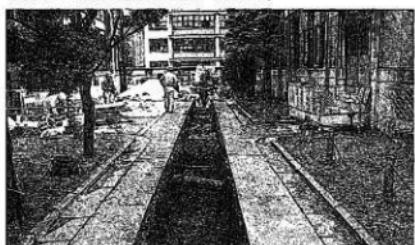


写真 53 9906 地点検出の第 1 号溝（東より）

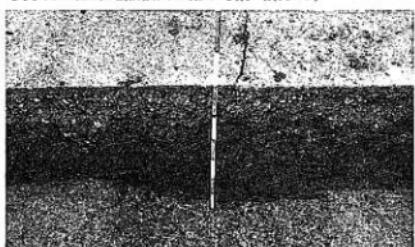
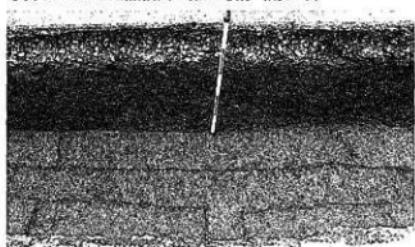


写真 54 9906 地点検出の第 2・3 号溝（南東より）



写真 55 9906 地点検出の第 5 号溝（南より）



## III-2 本荘北地区

(図 2 参照)

### 1. 血液照射管理室増築工事に係る試掘調査 (9910)

&lt;調査日&gt;

2000 年 1 月 25 日

&lt;調査対象面積&gt;

2m<sup>2</sup>

&lt;調査員&gt;

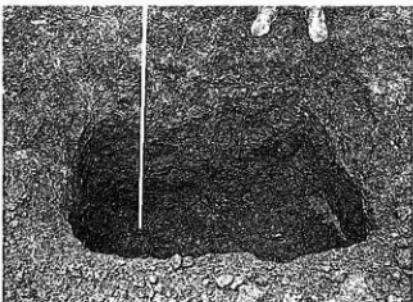
大坪志子。

&lt;調査概要・結果&gt;

年度当初は予定されていなかった事業でのひとつである。計画が浮上した当初は年次報告書の作成期間を避け、3 月以降に実施する予定であった。しかし、補正予算のため衝撃・振幅環境研究センター・サテライト・ベンチャービジネスラボラトリー新営工事に係る調査を急遽実施しなければならず、2 月から小畠が後者の工事に係る調査をおこなうことになり、また 3 月以降に実施しなければならない発掘調査・立会調査が集中しており、年次報告書作成の合間に大坪がことに対処することとした。

調査対象地は周囲を建物に囲まれ重機の搬入が不可能であり、また 1997 年に行われた既存建物の調査結果から擾乱を受けている可能性も高く、まず人力による試掘をおこなうこととした。調査地は既に周囲 3 方と中央にガス管が通っており、水道管 2 本と橋も設置されていた。擾乱を受けていないと思われる 2 箇所に 1 × 1m、深さ 1m のトレンチを入れたが既に擾乱を受けており造構・包含層ともに確認されなかった。調査対象地内のはば全体にわたり擾乱を受けており造構面が遺存している可能性は非常に少ないものと判断した。

写真 56 9910 地点試掘トレント（西より）



### III-3 本荘南地区

(図25参照)

#### 1. 医学部エイズ学研究センター・動物資源開発研究センター新営に係る配管切替工事立会調査(9801)

##### 〈調査期間〉

1999年3月10日～3月31日

##### 〈調査対象面積〉

57.5m<sup>2</sup>

##### 〈調査員・参加者〉

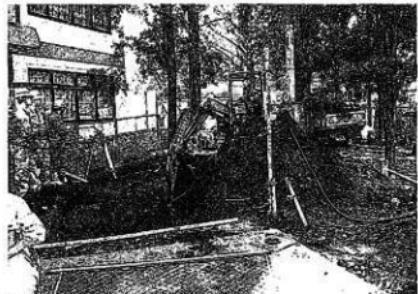
大坪志子、  
土田ちえみ、林田恵子。

##### 〈調査概要・結果〉

昨年度末、急速申し渡された調査であり、調査日程が昨年度の年次報告書の作成期間中であったため本年度の年次報告に調査結果を掲載する。

現存の動物実験棟関連の電気・ガス・給水・排水関係の切替を行うもので、掘削の深さが遺物包含層に達する排水と電気関連マンホールの部分について立会調査を実施した。実際掘削をすすめると施設部から渡されていた既設配管配置図とは実際の配管が合わず施工不可能な場所があり、その場で排水管の杭の位置については4箇所変更、2箇所について設置を取りやめ、排水管もこれらに合わせて配管を行った。杭部分において2箇所、遺構面に達した。うち1箇所で浅いピット状の遺構検出し、記録をとった。他1箇所では遺構は確認されず、排水管部分についても遺物包含層・遺構面には達せずそのまま切替工事をおこなった。

写真57 9801地点掘削状況（南より）



#### 2. 医学部エイズ学研究センター動物資源開発センター新営電設工事に伴う立会調査(9902)

##### 〈調査期間〉

1999年6月14日～7月14日

##### 〈調査面積〉

40m<sup>2</sup>

##### 〈調査員〉

小畠弘己。

##### 〈調査概要・結果〉

本事業は、電線埋設溝とそれに付随するマンホールの設営であり、溝に関しては、-80cmと従前の発掘調査や立会調査の結果からほぼ包含層上面にあたるため支障はないものとし、マンホールの掘削箇所についてのみ立会調査を行った。

その結果A地点で埋設管や後世の搅乱や埋め土が認められ、B～H・J地点においては包含層を確認し少量の遺物が出土したが、遺構は認められなかった。しかし、I地点では包含層下（地表下125cm）においてはほぼ北方向に走る幅35cm深さ20cmあまりの断面U字形の溝1条とその東1mの地点で2個の連接する柱穴（直径20cmあまり）を検出した。溝や柱穴からの遺物の出土はなかつたが、方向や土の色からして、これらは古代の遺構と考えられる。

写真58 9902地点I地点遠景（南より）

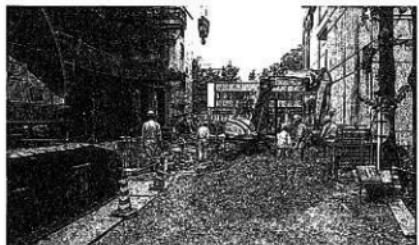


写真59 9902地点I地点遺構検出状況（南より）



**3. 医学部エイズ学研究センター・動物資源開発センター新営基礎工事に伴う立会調査（9904）**

〈調査日〉

1999年7月19・26日

〈調査面積〉

約 2m<sup>2</sup>

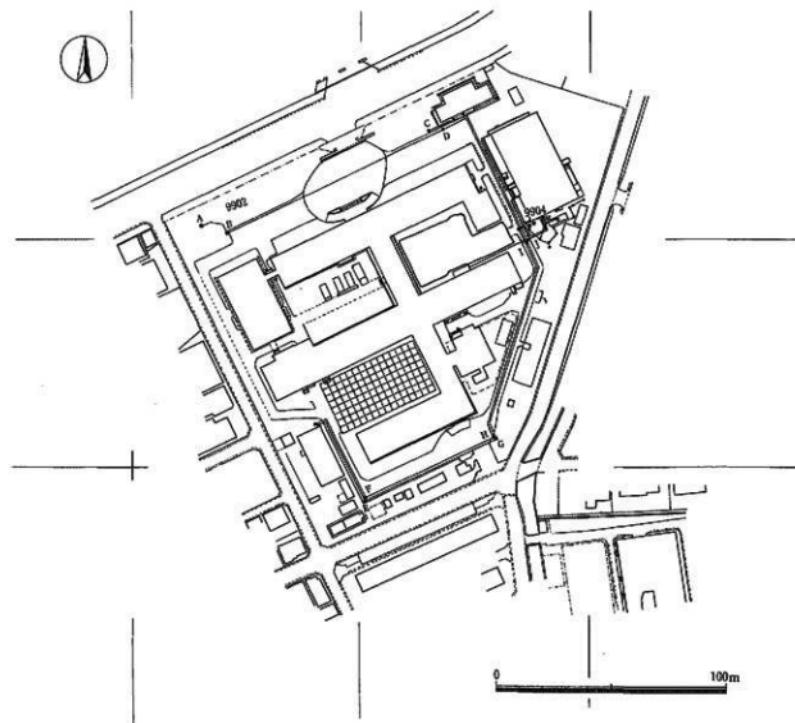
〈調査員〉

小畠弘己.

〈調査概要・結果〉

直径1mの基礎用ピットの掘削に伴う立会調査であったが、既存建物の隣接地であり、それらの基礎によってかなり破壊されていた。遺構・遺物とともに検出できなかつた。

図25 本荘南地区調査地点位置図（1/2000）



## 跋文

本年度埋蔵文化財調査室の発掘は4月当初から3月下旬まで行われ、調査遺跡は14カ所、その調査面積は約4,800m<sup>2</sup>にも及んだ。木庄地区の医学部付属病院の新設工事に伴う発掘から始まり、引き続いて工学部実験棟や工学部衝撃・極限環境研究センターの建設に伴う調査とほぼ年間を通して大規模調査が行われ、その中間にも各種の立ち会い調査が組み込まれるなど、熊本大学埋蔵文化財調査室は多忙を極めた年であった。調査が年度末まで及んだために小畠・大坪両氏は発掘を行いながら、一方では『調査室年報』の作成にもあたらなければならず、土日祭日を返上して整理・報告書作成作業に従事しなければならなかったことは、極めて遺憾である。このために植物種子や動物遺存体などの自然科学分析の結果がこの年報に十分に反映させることができなかつたことは誠に残念であった。

木庄地区的調査では古墳時代初期の集落址が検出され、白川左岸の自然堤防上には弥生時代以降連続として古代人の住居地が形成されていたことが判明し、また黒髪地区では少なくとも縄文時代後期から大規模な集落址が営まれていたことが発掘の結果から窺われ、熊本大学構内遺跡だけでも、考古資料から熊本の歴史を語ることができることが明らかにされたことは極めて重要である。さらに今年に入っての工学部衝撃・極限環境研究センター建設地での調査では、江戸時代の「畑の歴史」が検出されたが、通常の畑の畝幅よりも小さく、何の作物が栽培されていたのか種子分析を急いでいる最中で、結果が待ち望まれる。昨年度発掘した自然科学研究科・理学部新設工事に伴う調査では、古代コムギとして最近注目されている「小穂」コムギが検出されており、栽培植物の変遷を知る上で貴重な資料となっている。

今日の発掘調査では考古学的な遺構を発掘するだけではなく、自然科学を中心とした分野の研究者の協力を得て、総合的な調査が一般化しつつあり、多くの研究スタッフを取り揃えている大学こそがその先陣をきらなければならないことは言うまでもない。今後学内の調査においても全学的な研究の取り組みが求められる所以である。

2000年3月25日

熊本大学埋蔵文化財調査室室長  
文学部教授 甲元眞之

## Summary

In 1985, Kumamoto University planned reconstruction of campus. But it was known that some of campus are designated as buried cultural assets zone. In the fiscal year 1994, Kumamoto University formed the Archaeological investigation committee and the Archaeological Operation Office in haste, and since then has been enforcing the excavations of the campus sites when the superannuated school buildings were rebuilt.

We have two main campus sites at another areas. The one is the Kurokami area where is constituted of the faculty of science and the department of technology (south area), the department of education, the law department, and the department of literature (north area), and locates in Kurokamimachi site. The site located at the foot of Mt. Tatuta (above 151.6m) on a low terrace (above sea level 18~25m) formed by the Shirakawa River. The site are regarded as an ancient station "Kokai". The other one is the Honjo area where is constituted of the medical science department, medical treatment junior college (south area), and the attached hospital (north area), and belong to Honjo site. The site located on a low terrace (above sea level 12 ~ 13m) formed by Shirakawa River, similar to Kurokamimachi site. It is 2km from Kurokamimachi Ruins to Honjo in a straight line. In the circumstance of Honjo site, there are large ancient village sites like Oe site and Shinyasaki site. The number of investigations in the current year is the following: excavations are 5, presence investigations are 6. The results are the following.

At 9901 excavation spot in the Honjo site, the space we excavated is 2405 square meters before a ward is constructed. We discovered 9 dwellings of the early Kohun Age, a ditch of the last stage of Kohun Age, 18 ancient dwellings, 16 ditches, a tomb of the Middle Age, and a ditch of the early modern time. As remains, including pottery and stoneware of the last stage of Jomon Age and from Kohun Age to early modern time. At the excavation, we are the first to discover the village of the early Kohun Age in this area, and made it obvious that the village spreads near the river.

The 9907 excavation spot in Kurokami, located on a low terrace formed by Shirakawa River. We excavated this point before the building of the faculty of science is constructed. The space is 136 square meters, we discovered the culture layer of the Jomon Age at 0.5 meters underground. The thickness of this layer is 20 centimeters and it includes about 200 fragments of pottery and some obsidian flakes.

The 9909 excavation point locates in Kurokamimachi Site too and is the nearest point to Shirakawa River. The space is 1853 square meters, and we excavated this point before the building of the department of technology is constructed. As a result, we researched 54 tombs of modern Age and the late Edo, and field of the Middle Edo. The field was covered with sand by flood. We found many pieces of ceramic, coins made from bronze and iron and a pipe, and discovered barleycorns and beans.

The 9908 excavation point locates in east Kurokami area, we didn't find any ruins and remains.

All four excavations in current year, we got splendid results as above. But we can't execute smoothly because of stuff shortage at longtime research, it is an issue must be solved as soon as possible.

熊本大學校(구마모토대학교)는 건물이 노후화된 관계로 1985년부터 재건축을 할 계획을 세우는 도중에 학교가 위치하고 있는 지역이 문화재보호지역으로 지정되어 있다는 사실을 알게 되었다. 그러한 이유로 재건축을 하기전에 앞서 해당문화재의 발굴조사를 위해 긴하게 조사위원회와 조사실을 전성하여 1994년부터 조사를 실시하게 되었다.

학교내의 유적은 크게 두 지구로 나누어진다. 첫 번째 지구는 공학부, 이학부(남쪽지구), 교육학부, 법학부, 문학부(북쪽지구)가 자리한 黑壁(구로카미) 캠퍼스로, 黑壁町(구로카미마チ) 유적에 해당된다. 이 유적은 龍田山(다자타산)-해발 151.9m 기슭의 상위지단구(해발 18~25m) 위에 위치하며, 고대 “鹽堀(코카이)”의 역사(跡跡)로 추정되고 있다. 두 번째 지구는 의학부, 의료단기대학(남쪽지구), 대학부속병원(북쪽지구)이 위치한 本莊(혼조) 캠퍼스가 이에 해당된다. 이 지구는 혼조유적의 일부로, 黑壁유적과 함께 白川(시라카와) 강의 상위하단구(해발 12~13m) 위에 자리하고 있다. 혼조유적은 黑壁유적에서 직선거리로 2km 끝 떨어져 있고, 가까운 곳에 大江(오오에) 유적과 新屋敷(신야사끼) 유적 등과 고대 대단위 위락유적이 분포하고 있다.

올해 해당문화재 조사실에서 실시한 조사는 발굴조사는 5건과 임시조사 6건으로 발굴조사의 성과는 다음과 같다.

9901지점은 혼조유적 내에 포함되는 것으로, 대학병원의 병동의 건설하기 위해 2405㎡의 면적의 발굴되었다. 발굴조사에서 확인된 문화층은 고분시대 말기의 주거지가 9기, 그 위층의 문화층에서 고분시대 말기의 도량 1기, 고대의 주거지 18기, 도랑 16곳, 굴뚝주건물 6채, 중세분묘가 1기, 근대 도량이 1곳 발견되었다. 출토유물로는 鐵文시대 후·안기의 토기와 花笠碗, 태석식구, 응 등과 함께 고분시대부터 근대까지의 陶器(도기)와 陶器(도자기)들이 출토되었다. 금번 조사의 가장 성과로서는 이 지역에서 처음으로 고분시대 初期(초기)에 속하는 흔파울 확인한 점이다. 또한 고대총락의 범위가 강 가까운 곳까지 분포하고 있음을 본 발굴조사에서 알게 되었다.

9907지점에서는 구로카미지구 속에 위치하고 있는 곳으로, 시라카와 강의 자연단구상에 자리잡고 있다. 본 조사는 이학부연구동건조사의 신축에 따라 조사를 실시하게 되었다. 발굴조사 면적은 136㎡이며, 지표면에 0.5미터 지점에서 鐵文시대로 생각되는 약 20cm 두께의 문화층을 발견하였다. 문화층에서는 早期(초기)부터 晚期(晩期)으로 생각되는 토기기가 200여점, 희토석박편 대여섯 점이 출토되었다.

9909지점 역시 구로카미마치 유적 속에 자리잡고 있는 곳이며, 기왕의 조사지점 중에서 가장 시라카와 강 가까운 곳에 있는 지점이다. 공학부의 연구동건물의 신축을 위해 1853㎡의 면적을 조사하게 되었다. 그 결과 근대 분묘와 에도시대 후기의 분묘 54기, 예도중기로 추정되는 발동이 발굴되었다. 에도시대의 밭은 흥수로 인해 흙의 내리와 땅의 모래층으로 뒤덮여 있었고, 출토유물로는 도자기, 화개(銅貨/鑄貨), 대봉(燈籠) 등이 확인되었으며, 발굴 속에서는 보리와 콩 등의 씨가 발견되었다.

9908지점은 黑壁(구로카미) 등쪽지구에 위치하는 곳으로 금번 발굴조사에서는 유물이나 유구를 확인할 수 없었다.

4차례에 걸친 금년도의 발굴조사에서는 위와 같은 큰 성과를 거둘 수 있었지만, 긴 기간 동안에 걸친 조사로 조사인력의 부족으로 조사가 원활히 진행되지 못한 점들은 앞으로 개선되어야 할 것으로 생각된다.

# 付篇 1999年度熊本大学埋蔵文化財保護対策組織

## 1. 熊本大学埋蔵文化財調査委員会規則

### (設置)

第1条 熊本大学（熊本大学医療技術短期大学部を含む。以下「本学」という。）に、熊本大学埋蔵文化財調査委員会（以下「委員会」という。）を置く。

### (任務)

第2条 委員会は、本学の施設整備に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する重要事項を調査審議する。

### (組織)

第3条 委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 各学部、医学部附属病院及び医療技術短期大学部から選出された教授又は助教授各1人
- (2) 大学院自然科学研究科長
- (3) 附属図書館長
- (4) 学生部長
- (5) 事務局長
- (6) 埋蔵文化財調査室長
- (7) その他委員会が必要と認めた者 若干人

2 前項第1号及び第7号の委員は、学長が委嘱する。

### (任期)

第4条 前条第1項第1号及び第7号の委員の任期は2年とし、再任は妨げない。

2 前項の規定にかかわらず、前条第1項第1号及び第7号の委員に欠損を生じた場合の補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

### (委員長)

第5条 委員会に委員長を置き、委員の互選によって定める。

2 委員長は、委員会を召集し、その議長となる。

3 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代行する。

### (議事)

第6条 委員会は、委員の過半数が出席しなければ議事を開き、議決をすることができない。

2 委員会の議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

### (意見の聴取)

第7条 委員長は、必要があるときは、委員以外の者を出席させ意見を聞くことができる。

### (調査室)

第8条 委員会に、埋蔵文化財の発掘調査に関する業務を行うため、埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という。）を置く。

2 調査室の業務、組織その他必要な事項については、別に定める。

### (事務)

第9条 委員会の事務は、経理部主計課において処理する。

### (準則)

第10条 この規定が定めるものほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が定める。

### 附則

1 この規則は、平成6年4月7日から施行する。

2 この規則施行後、最初に委嘱される第3条第1項第1号及び第7号の委員の任期は、第4条第1項の規定にかかわらず、平成8年3月31日までとする。

## 2. 熊本大学埋蔵文化財調査室要項

### (趣旨)

第1条 この要項は、熊本大学埋蔵文化財調査委員会規則第8条第2項の規定に基づき、熊本大学埋蔵文化財調査室(以下「調査室」という。)の業務、組織その他必要な事項について定める。

### (業務)

第2条 調査室は、熊本大学(熊本大学医療技術短期大学部を含む。以下「本学」という。)の施設整備に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する次の業務を行う。

- (1) 実施計画の立案及び実施に関すること。
- (2) 出土した埋蔵文化財の整理、保管及び保存に関すること。
- (3) 文化庁等に提出する報告書の作成に関すること。
- (4) その他必要な事項

### (組織)

第3条 調査室に室長を置く。

2 室長は、調査室に関する業務を掌理する。

3 調査室に調査員その他必要な職員を置くことができる。

4 調査員は発掘調査に関する業務を行う。

### (室長等の任命)

第4条 室長及び調査員は、本学の教官のうちから学長が任命する。

2 学長は、必要がある場合は、学外の者を調査員に委嘱することができる。

### (事務)

第5条 調査室の事務は、関係学部等の協力を得て、経理部主計課において処理する。

### (雑則)

第6条 この要項に定めるもののほか、調査室の運営に必要な事項は、熊本大学埋蔵文化財調査委員会が定める。

### 附 則

この要項は、平成6年4月7日から実施する。

## 3. 1999年度熊本大学埋蔵文化財保護対策組織

### 1 埋蔵文化財調査室組織(1999年4月1日現在)

〈室長〉	(併・文学部教授)	甲元 真之
〈調査員〉	(併・文学部助教授)	小畠 弘己
	(併・文学部助手)	大坪 志子
〈事務補佐員〉		松嶋木綿子
〈室内作業員〉(1999年10月~2000年2月)		土田ちえみ 林田 恵子

## 2 埋蔵文化財調査委員会

委員長	北野 隆 (熊本大学工学部教授)	任期 (1996.4.1 ~ 2000.3.31)
委 員	木下 尚子 (文学部教授)	(1998.4.1 ~ 2000.3.31)
	鶴島 博和 (教育学部教授)	(1998.4.1 ~ 2000.3.31)
	大久保憲章 (法学部教授)	(1998.4.1 ~ 2000.3.31)
	石田 昭夫 (理学部教授)	(1998.4.1 ~ 2000.3.31)
	小川 尚 (医学部教授)	(1998.4.1 ~ 2000.3.31)
	今村 順茂 (薬学部助教授)	(1998.4.1 ~ 2000.3.31)
	土龟 直俊 (附属病院助教授)	(1998.4.1 ~ 2000.3.31)
	葛川 忠 (医技短大部教授)	(1998.4.1 ~ 2000.3.31)
	秋吉 卓 (大学院自然科学研究科長)	(1998.4.1 ~ 2000.3.31)
	金原 理 (附属図書館長)	(1997.5.16 ~ 1999.5.15)
	平山 忠一 (附属図書館長)	(1999.5.16 ~ 2001.5.15)
	森 光昭 (学生部長)	(1998.10.1 ~ 2000.9.30)
	岩崎 司 (事務局長)	(1998.4.1 ~)
	甲元 真之 (埋蔵文化財調査室長)	(1994.5.16 ~)

### 審議事項

- 1999年4月19日 1998年度の埋蔵文化財発掘調査結果について  
                   1999年度の埋蔵文化財発掘調査について  
                   埋蔵文化財調査室経費の要求について  
                   教員定員流用の申請について

# 報告書抄録

ふりがな	くまもとだいがくまいぞうぶんかざいちょうさしつねんぽう 6							
書名	熊本大学埋蔵文化財調査室年報 6							
副書名								
巻次								
シリーズ名	熊本大学埋蔵文化財調査室年報							
シリーズ号	6							
編著者名	甲元眞之・小畑弘己・大坪志子・松崎木綿子							
編集機関	熊本大学埋蔵文化財調査室							
所在地	〒860-8555 熊本県熊本市黒髪2-39-1 TEL. 096-344-2111(代) FAX. 096-342-3150							
発行年月日	2000年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くろかみまち 黒髪町遺跡 (9907地点)	くまもと 熊本県 熊本市 黒髪	43 201		32° 48° 26°	130° 43° 57°	19990922 19991005	136.5m <sup>2</sup>	学校敷地内 の開発事業 に伴う
くろかみまち 黒髪町遺跡 (9908地点)	熊本県 熊本市 黒髪	43 201		32° 48° 49°	130° 43° 59°	19991124 19991125	42m <sup>2</sup>	学校敷地内 の開発事業 に伴う
くろかみまち 黒髪町遺跡 (9909地点)	熊本県 熊本市 黒髪	43 201		32° 48° 30°	130° 43° 44	20000214 20000324	1,853m <sup>2</sup>	学校敷地内 の開発事業 に伴う
ほんじょう 本庄遺跡 (9901地点)	熊本県 熊本市 本庄	43 201		32° 47° 37°	130° 42° 41°	19990405 19990902	2,405m <sup>2</sup>	学校敷地内 の開発事業 に伴う
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
黒髪町遺跡 (9907地点)	散布地	縄文	ピット 10	縄文土器				
黒髪町遺跡 (9908地点)	集落址	近世	遺構なし	磁器片				
黒髪町遺跡 (9909地点)	生産遺跡 墓地	近世	畝 約200 近世墓 54	近世陶磁器片 釘 煙管 銅錢				
本庄遺跡 (9901地点)	集落址	古墳 奈良・平安	竪穴住居址 6 土壙 3 竪穴住居址 12 堀立柱建物 6 溝 18	縄文時代石器 古代土師器 古代須恵器 胴衣壺、鉄製品 鏡、玉				

---

## 熊本大学埋蔵文化財調査室年報 6

— 1999 年度 —

平成 12 年 3 月 27 日 印刷

平成 12 年 3 月 31 日 発行

編集兼発行者 熊本大学埋蔵文化財調査室

熊本市黒髪 2-39-1

電話 (096) 344-2111

(内線 3832)

印刷所 シモダ印刷合資会社

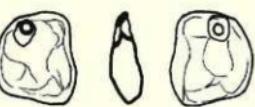
---











Published by  
**Archaeological Operation Center**  
**The Kumamoto University**  
**Kumamoto, 2000**